
流星のロックマンnext stage? ~FM星の危機・過去の遺産~

虎んセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマンnext stage? -SF星の危機・過去の遺産-

【コード】

N7862

【あらすじ】

3度地球を救つた伝説のヒーロー、ロックマン改め星河スバル。平和(?)になつた地球での彼の日常を描く。FM星に二度目の危機!?スバルの記憶が・・・! フォルテに立ち向かう・・・光熱斗は生きていた!

あれ？（前書き）

平和になつた地球で、徐々に日常を取り戻しつつある星河スバルと
ウォーロック。そして彼の仲間たちとの関わりを描く。

あれ？

時は22XX年、地球では電波世界が発達していた。

・・・星河家・・・

「ウォーロック、ウォーロックってばー。」

「ん、なんだスバル？」

「なんだじやないよ、これ見て」

「ん・・・、He1ラシングナルじゃねーか。なんで点滅してんだ」

「わからない。けれどこの近くにきっと助けを求めている人がいるんだよ」

すると、ウォーロックは5秒もたたないついで

「おい、あれをみろ」

スバルは自分の部屋の窓から、外を覗いた。

「人が川でおぼれてる・・・」

「大丈夫ですか！今助けてます！」

スバルは叫んだあと、川に飛び込んでいった。

・・数分後・・

「助けていただいてありがとうございました」

溺れていたのは男の人だ。スバルと年は近いように見える。

そしてなぜ川の中にいたのか、気になつたスバルは尋ねた。

「あのー、どうして川に溺れていたのですか」

男は答えた。

「いやあ、実はドラマの出演がはじめて決まって、川に溺れる役
だつたから練習してたんだよ

それで川に入つてたんだ」

「へえ～、ドラマかあ」

スバルは、役者つて大変だなー、と思つていた。すると、

『おいおい、お話し中のところが、服びしょびしょだりー、
カゼ引くぜ』

ウオーロックは珍しくまともなことを言った。

「そうだねウォーロック、あ、そうだ、君も僕の家に来てよ。このままいたらガゼ引くよ」

「ほんとうに・・あつがといひ、もうこえれば君の名前は聞いてなかつたね」

「ぼくは星河スバル、この近所に住んでるんだ。で、ここにはウォーロック。ぼくのウイザードさ」

「ぼくは三中トキト。へー、ウォーロックって言つんだ、かつこいいウイザード持つてゐるね」

『かつこここーへーはつまつま、わかるやつまつさんとわかつてゐるんだな』

「『めぐら』、『こつ謫子乗つせすこから』

『え、なんか言つたかスバル』

「なんにもないよ」

ハハハ・・・

練習（後書き）

雑くてすみません。

「川中デキト」はオリジナルで、「デキト」は漢字で「溺人」、川の中で溺れていた人ということで「川中溺人」にしました。

ストーリー募集しています。よければコメントください。

まわかの・・・

ただいまー

スバルの声が家の中に響く

「おかえりスバル、ん?この人は友達?」

「うん、川中(テキト)って言つんだ。」

「先ほどはスバル君にお世話をになりました。」

テキトは丁寧な口調で言った。

「あら

あかね（スバルの母）は、あることにせつと戻りいた。

「服びしょびしょよ。さきに着替えなわい」

そしてスバルは服を着替え、あかねが服を洗うから待つててね、
ということでテキトはスバルの服をかりて、一人はとりあえずスバルの部屋ですごしていた。

「スバル君は小学生？」

「勘」

「うん、『ドラマ小学校の6年生だけど、なんでわかつたの？』

ハハハ

そしてテキトは話を続ける。

「僕も6年生なんだ」

「どうの学校？」

「いや、通信教育なんだ、仕事が忙しくて・・・なかなか学校に行けなくて」

「・・・」

少しの間沈黙が続いた。デキトの顔は少しあびしそうだった。

「でも・・・」

デキトは再びしゃべり始めた。

「でも、田標があるから」

スバルが聞き返すと口を開けたりする

『何なんだ、お前の田標つて』

ウォーロックが先に言った。

「・・・、響さんに追いついて、結婚することだよ。」

スバルは驚いた。しかし、そんなスバルに臆することなくウォーロックは

『響つて、誰だ』

「響//ソラだよ、あの有名な」

「・・・」

スバルは驚きすぎて言葉も出ない。

「スバル君どうしたの？」

『キートは言った。』

しかし、スバルは言葉が見つからない。するとまたウォーロックが言った。

『ああ、響//フクサは//こいつのブリザーだぜ』

「え？、ブリザーだったの！？」

テキトはさすがにびっくりした。

「う、じめん。こんな話してしまつて」

一ピンポーン

誰かが来た

まわかの・・・（後書き）

すみません。完成度が低いです。

とにかくこれからも書いていくんでよろしくお願いします。

訪問者

「スバル、今洗濯物取り入れて手が離せないから代わりに出て」

あかねがほえる。大吾（スバルの父さん）は今WAXAで仕事中で家にいない。

『スバル、とりあえず行こうぜ。わりーがデキト、ちょっと待つてくれ』

そう言つとスバルをハンターV Gの中から引っ張り、強引に連れ出した。

ガチャツ

・・・

「久しぶりだな、スバル、そしてウォーロック」

「・・・、あつ、暁さん。どうしたんですか」

「これから、遊撃隊の・・・解散式を行つ

「えつ？」

「なーに、理由はWAXAで説明するぞ、これから来てもうりえるかな」

「はい・・・」

「じゃあ今から2時間後だ、それまでにきておけよ

『ウォーロック、お前も遅れるなよ』

『けつ、お前に遅れて、暁のせいにすんなよ』

『・・・こまかしゆう、シドウ』

『おまえへつ、無視すんなあアシッド』

暁&アシッドは帰り、スバルは部屋に戻った。

そのころにはすでにテキトの服は洗えており・・・

「洗つていただきありがと」やれこました

「また来てね」

あかねがいった。

「はい、じゃあスバル君また」

「うん、じゃあまたね

ギイ〜ツ、バタツ！

「スバル・・・」

あかねはしゃべりだした

訪問者（後書き）

今一気に書を上げてこるので、また意見のほかよろしくお願いします。

「なー、母さん

「えりつたの?」

「・・・

「『めぐ、れつせの話全部聞いてた』

-----ポンボーン-----

『おースバル、この感じは間違いねえ、ハープの野郎だ』

「半井ぐりこ会ってなかつたもんね」（あかね）

「・・・」

「でもね」

あかねは続ける

「わたしも大吾さんが事故にあったときショックだつた。
でもね、ずっと信じてた、たとえ連絡取れなくとも生きている
つて、いつまでも好きだつて。

スバルもミンラちゃんをずっと応援して、・・・好きだつたんで
しょ。

『テキト君もミンラちゃんの』とすきらしこけど、スバルは『テキ
ト君以上にミンラちゃんのこと
想つてたつて、信じなれ。あなたとミンラちゃんはブライザー
なのよ。

・・・今日こまから、ミンラちゃんに会つか、会わないか、ど
うする?

スバルに協力するわ?」

「じゃあ…」

玄関の外

「スバル君どうしたのかな？」

『・・・・フフフ』

「なに笑ってるのハープ？」

――ガチャツ――

「お母さん（スバルのお母さんのこと）」

「ミソラちゃん、久しぶりね」

「お久しぶりです、あの～スバルくんは居ませんか」

「スバルなら・・・今力ゼで寝てるわ」

「えつ、そうなんですか、じゃあ、」

「スバルの看病なら大丈夫よ」

「えつ」

「NAXAでなにがあるんでしょう」

「は、はい。」

「じゃあスバルの分まで頑張ってきて」

「は、はい」

「また来てね」

「は、はい、では失礼します」

「『めんね』

――ガチャツ――

「今日のスバルママ、いつもと違つような

『フフフツ』

「ハープ、さつきからなに笑つてているの」

『教えてほしい?』

「う、うん」

『実はね、・・・・』

「・・・・、ハープつ――!」

『なーにソラ』

「電波変換よつ――!」

『はーい』

「電波変換、響ミソラ、オン・エア！」

「行くよー。」

提案（後書き）

設定が「ひや」「ひや」しててすみません。
意見など、よろしくお願ひします。

ただいま電波変換中

『おいスバル、いつものお前らしじくねーじゃねーか

「・・・」

『やつきの男の言つたことか?ハハハ、気にすんな

「・・・うん」

『かわんねえなあ・・・・・・・・。まあ、もつ勝手にしやがれ

ウォーロックはワイザードOFFした。

「ここがスバル君の部屋ね

・・・その通り・・・・

『んで、これからどうあるの?』『うー』

「ああ、知らない」

『そり・・・』

「そこまでかんがえてなかつたんだ・・・」

スバルが切り出した。

「ミソラちゃんのこと……、そこまで考えてなかつたんだ。

ただ……ミソラちゃんとは……なんとなく付き合いをしていただけで……

デント君みたいに、そんな田標とか、結婚したいとか、そのためにがんばるんだって

言っている人がいるのに。なんか僕、デントくんに失礼じゃな
いかな。」

『……そうだもんなのか』

「……」

『はう、とうあえずWAXAにこいつを。なんかあんだろ』

「そうだね……」

『で、今日はやつかるの

・・・

「ハープ、テント君って誰だったっけ」

『ハーパー、台本ぐらりと通しておきなさいよ。明日のドラマの共演者でしょ?』

「あつ、あの人か」

「・・・、とつあえず行くよ

ただいま電波交換中（後書き）

あいかわらず、字数が少ないです。
もうあと2話位で終わる予定なんですが
あくまでも予定です。

ウォーロックがちょっと性格違うかもしねないけれど

『なんか言ったか』

いえ、何も。

再会

「えへ、」これより解散式を行います。では、まずは眞理からのおいせつです」

「本日はお集まついただき有難うござります。

約一年前、メテオGから地球を守るところレゾンのもと、暁くんをはじめとする遊撃隊が結成されました

見事彼らのおかげで地球の危機を脱することができます。

そして事件解決から半年が過ぎ、暁くんが戻つてこれたことで、レゾンは達成され

平和が訪れた今、もはや遊撃隊の出番はなくなつたため、ここで解散式を行う所存でございます。

遊撃隊の皆さん、そしてメテオGの解決に当たった皆さん方、
I.I.Iで任務終了とします。

いまだお疲れ様でした。」

・・・パチパチパチ・・

「では次に隊長からの挨拶です」

(え？俺のこと？)

(え？ シデウ)

(あこせつなんて考えてなかつたよ～、助けてくれよアシッド)

「暁君、はやく出て来なさい」

「はい」

長官に呼ばれ、しぶしぶ行へシドウであった。

『あら、ウォーロック、久しぶりね。』

『ゲッ、ハープじやねえか。なんでここにいるんだ』

『ソラの付き添いよ。そついえば、スバル君元気なさそうだね』

『俺は何にもしてないよ』

『あら、 そうなの。』

『ふん、知るかよハープ。それよりお前にそなんなんだよ、かつてに部屋にはいつてきやがつて』

『あ～～う、やつこいつだけは敏感なのね』

『まあ、何のじとじとひんだ』

『わあね』

「……、というわけで解散式を終了させていただきます」

・・・終了後・・・

「・・・」

『なあスバル、どつか面白がりやつなどい行ひやが』

「・・・」

『やうこまあ今日風景二、ミン・・・』

「スバルくんっ！」

誰かが声をかけた。もちろんスバルにとって、聞き覚えのある声だ。

「せめりうん！」

「半年ぶりだつた、元氣にしてた？」

「・・・、うん」

『あ、やうこつが・・・』

『ちうて、邪魔者はどこかにいきましょうか』

――がしつ――

『おいハープ、はなせ、はなせつてオ~~~~~』

ウォーロックとハープがどこかへ行ってしまった・・・

「スバルくん、来てほしいところがあるんだ。一緒にいこう」

「いいよ・・・」

やうして一人は歩き出した

再会（後書き）

とにかくいまは勢いで書いているので、読んでいただいている方に
はもしかするとわからないことあるかも知れぬもううんでも、また
意見などよろしくお願ひします。

あと一つ前のあとがき、鍵括弧が改行で飛んでしませんでしたが、一
応ウォーロックの言葉なので。

交代（前書き）

こままで一つのページで量が少なかったので、ちょっとだけ増やします。

交代

「前回までのあらすじ～

遊撃隊の解散式が終わり帰ろうとしたスバルは、6ヶ月ぶりにソラと再会する。

あらすじー終ー

「映画の撮影、どうだった？」

スバルはミンラに質問する。

「けつこう楽しかったよ。まー、はじめは周りの人気がほとんど知らない人たちだったけど」

「そりなんだ・・・」

・・・

そして一人がついたのは、・・・

「やつぱりここ景色が一番好きだなー」

「ソラちゃんが行きたかったのは、ここへ。

「うん。だって、ここがはじめてスバル君とあつたところだから

着いたのは展望台。スバルが毎晚いく場所だ。

もうすでに夜7時を回っていて、そこには無数の星が輝く。

・・・そのときだった

スバル～

誰かの呼ぶ声が聞こえた。その声の主は

「ウォーロック？」

スバルが声をかける

『探したぜスバル』

「ハープは？」

『ソラが尋ねる

『いるはずだろ、この辺に感じないか』

『ちよつと待つて、ウォーロック。私がしゃべるわ。実はね・・・

『実はな・・・』

「えつ、なんでスバル君のところにいるの」

ハープはハンターV Gの中にいた、しかし・・・

•
•

～～～つい1時間まえの出来事～～～

『最近ずっと暇なんだよ あ~~~~~平和なんてつまんね
え！～！』（ウォーロック）

『あら、いいじゃない、平和つていいわよ』（ハープ）

『なんでお前はそんな落ち着いてられるんだよ』

『毎日が楽しいからよ、ミンクの台本の相手したり、一緒に買い物したり、充実してるからね。』

でも、たまには休みほしいわ』

『フン、いいじゃねーか。スバルは勉強ばかりしやがるし、なん

『せ外にでても、さうと云はばか眺めてやがるから何も変化がねえ』

『まつたく逆の生活だわね』

(もし私たちを入れ替わつたら・・・、おもしろいな)

『だから、明日一日あなたは//ソフのウィザード、私はスバルのウィザードで過ごさないかってことよーーー!』

『は?』

『明日一日、入れ替わらない?』

『なんだ』

『ウォーロック』

『はつはつはつ、なんかおもしろそつだな、いいぜ、その計画の
つた！』

『じゃあ、一人を探しに行きましょ』

『一暴れしてやるぜ！』

・・・・・ヒトのまなざし、ハハ。

～～～終～～

「ん~、いいよ、スバル君は、ビーフ~」

「いいよ、最近ウォーロックがつねにへりねをへて」

『なんか言ったかスバル』

『スバル君よかつたわね、ウォーロックがバカで』

『くそ、ハープ、…………つて無視すんな』

『じゃあ行きましょ、スバル君』

『ミンカラちゃん、一田だけ我慢してね』

「だいじょうぶだよ。スバル君もハープと仲良くな

『……おい、俺のことは無視かよ』

「ロックくん、よろしくね」

『いいぜ、その忙しいとやらを体験してやらあ』

そして一人は帰つていった。

//ソラとスバル

～～前回までのありすじ～～

スバルと//ソラのウェザードが入れ替わった。

～～終～～

「ただいま～」

しかし返事は返ってこない

『誰もこねえのに何であこわつたんだ』

「なんどなく

ウォーロックの質問に、//ソラが即答する。

「わたし、ふり入つてくるな、ウォーロックはこの部屋で待つて。じゃ

ガチャツ・・・

『意外ときれいだな・・・』

ウォーロックはせつ思つて、部屋を物色し始めた。

『ん、なんだこれは』

～～～30分後～～～

「ウォーロックお待たせ」

『おい、風呂だけで長すぎだわ』

「女の子のお父さんは長いのよ」

『んで、なんだこれは、結構面白かったけど』

～～～

月×日

今日はスバルと2回目のデート。
けっこう緊張したなあ。
場所はロッポンドーヒルズ。
まずはフジヤマパフェ（？）を食べた。
けっこうおいしかったけど、まだつべりいは食べれたともも
う。

そのあともこりこりやって、そこにはタワーの展示会にい

つた。

ムーのことについてガイドさんから話を聞いていたスバルは、なんかかっこよかったです。

でもそのあとじゃまが入ってテートベニルじゃなかつたけど…

帰りにスバルはブライダルを結んでくれた。

またこれからも一緒にね。

}}

}}

「ちょっと…、な、なに勝手に見てんのよオ」

ミンラは顔を赤くしながら言つた

『もしかして、お前』

「・・・」

『ソニアの顔がさらに赤くなつていく

『・・・パフェ、もつと食いたかつたんだな』

(・・・バカでよかつた)

「やーて、ウォーロック、今から手伝つてもいいわよ」

そこで、本らしきものを一冊出してきた。

『なんなんだ、これ』

「台本よ、明日のドラマの撮影までに覚えないといけないこの」

『なんで俺が手伝ひただ、覚えるのはお前だろ』

「読み合せよ、ドラマのシーンを想定してセリフを言つて聞かせるべし、早くやれ」

『何でやらなーといけねえんだよ』

サツ・・・

~~~~~

ミソラへ

ウォーロックは何でもやるつていつてたわ  
多少無茶させても大丈夫だからどんどんこき使いなさい  
じゃ、明日の撮影がんばるのよ  
スバル君が、会うのたのしみにしてるつて  
じやあね。おやすみなさい。

~~~~~

『けつ、ハープの野郎の命令か』

なぜかウォーロックはハープに弱く

『俺は女が二ガテなんだよ』

「ウオーロック、なんか言つた？」

『なんもねえよ、で、俺は何をすりやあいいんだ』

「この役やつて

・・・・・ 読めねえ』

「えつー？」

『あー、でもこいつなら知ってるぜ』

「え、ビーン・・・・・・川中・・・・・・、これなんて読むの」

『テキト、りしき。おまえも読めてねえじやねえか』

「もう～～～、いつもならハープが教えてくれるのよーーー。」

『けつせよく読めてねえじやねえか、さつはつはつ』

「もうこい、わたし一人でやるから、ウォーロックはどうかい
つて」

そして、ウォーロックは外に追い出された。

『これじゃあスバルんと』と、一緒にねえか

そう思いながら、しぶしぶリビングのソファーで床につくので
あつた。

//ヒトリカワーロック（後書き）

ルナ「もっすぐー〇話題なのに、なんでいまだに私が出てこないのよ！…！」

キザマロ「まあ、おひつこでやだせこ、委員長」

ゴン太「もっすぐでられるから」

ルナ「おだまつ、一人とも。このまま終わつたら、ただのスバル君とミソラちゃんの恋物語じゃない。しかもこの話の紹介には、スバルとスバルの仲間との日常を描く、って書いてあるのよ。私たちの出番がなじつておかしくじや…」

- - - - 強制終了 - - - -

出番はあるので待つてください。

F.M.H (前書き)

10話目に入っちゃったとしたサイドストーリーを書きました。
閲覧よろしくお願いします。

この物語は『ディーラー』が滅びてから半年後のこと。

「ケフュウス様、シリウスを倒しこの星の危機を救つたウォーカー
ツクならどうかと」

「確かに彼のおかげでこのホシは救われた、しかし・・・・・・」

「しかし・・・・?」

「人気と強さがあつても、彼自身にホシを治める能力があるとは
限らない。」

「・・・」

「ヒンペルよ。」

「はい」

「彼は、このホシの政治学の最高峰、FM政治大学校を卒業したことば知つてゐるな。」

「はい」

「なぜ彼が、政治学を志したか知つてあるか。」

「・・・・いえ」

「彼はこのホシの政治に参加し、いづれ私に近づき・・・・殺そうとしていた。それはなぜなのか」

「・・・・」

「彼は故郷のAM星を滅ぼされた、・・・・私によつて

「・・・・」

「それを恨んだウオーロックは私の首を狙つた。

そしてあるとき、われわれと友好関係を結ぼうとする宇宙人がいた。」

・・・・・

「それが星河大吾率いる地球人だ。」

・・・・・

「しかし、あのころの私たちは誰も信じることができなかつた」

・・・・・

「そして、私はウォーロックに偵察・抹殺命令を出した」

・・・・・

「そのときだつた、ウォーロックは去ろうとしたその瞬間、私が
アンドロメダの鍵を奪い、

・・・ 地球人の宇宙船へ逃亡した」

・・・・・

「そして、彼は・・・星河大吾らと出会い・・・地球人を助け、
自身も逃亡した。」

「われらは使者を送つたが、次々とやられてしまひアンドロメダをも倒されてしまった。

星河大吾の息子、星河スバルとウォーロックに

「エンペルよ

「はい」

「私がこのホシを去つてしまひ、このホシに危機がおどされたと
あ、このホシを救えるのは

・・・・ウオ・・・・・

・・・バタン・・・・・バンバン！・・・・・・・

「ケフェウスよ、私の故郷も貴様によつて滅ぼされた・・・

「クッ、わ、悪かった、しかし、き、君の故郷を襲わせたのは私

ではない・・・

「俺がそんなこと知るかよ、お前じゃなくても襲つたのはFM星人だ。

Hであるお前の責任なんだよ」

・・・・・・・・

「じゃあな。ケフェウス。」

「クソ!」

「ケフェウス様、今地球からの・・・・!？」

「フツ、見られてしまったか・・・。まあいい。順番は狂うが、まづはHのホシの希望とやらを消しに行くか」

「おまえには・・・たお・・・せ・ん」

バタツ！

「ケフェウス様、気をお確かに」

「あばよ！」

・・・エンペルは消えていった。

「ケフェウスさま

」

FME王（後書き）

スバルとハープ

「お帰りなさい、スバル」

「ただいま、母さん」

「もういい、飯できてるわよ。先に食べなさい」

・・・10分後・・・

「母さん、フロ入ったへるよ」

『やっぱ部屋きれいね』

・・・10分後・・・

帰つてきひやつと出たハープの言葉

『それにしても、あなたのお母さん、どうして私に気がつかなかつたの?』

「いつもあんな感じだよ。基本はウォーロックからしゃべるからね。

今日のウォーロックおかしいな、とか思ってるんじゃないかな」

『ふうん、そうなんだ』

・・・ガサゴソ、ガサゴソ・・・・

『何してゐの?』

「勉強だよ。明日は学校だし・・・・ちがんと予習もしておか
なきや」

『へえ～～～、がんばってねえ～』

・・・ 1時間後 ・・・

『ねえスバルくん、なんかすることない、暇なのよオ』

・・・

スバルは集中しはじめるが、なかなか集中の糸が切れない・・・

・・・さりに1時間後 ・・・

『ね／＼え／＼、スバルく／＼ん、なん／＼か／＼な
い／＼の／＼オ』

・・・・・

・・・さりに1時間後・・・・・

・・・・・・

スバルはまだ集中している・・・

『・・・フフフ、これならどうかしら・・・』

・・・カチッ

と・び・か・う・シグナル

それぞれのきょうつをの～せ～て

「・・・わ～～～あ～～～
」
「～～～つ

力チツ

「ダメだよハープ」

『だつて～～～～～～～～殿なのよ～～～』

「そんなこといわれても・・・」

『じゃあ、なんで//ツカのロゴがいたむじいさんのかじりね』

「や、それは・・・」

返事に困惑するスバル。

『うえすぎよ。・・・・・でも余わなこ聞でも//ツカのひと
応援してくれていたのね』

「…………

『もしかして、…………照れてる?』

「照れてないよ

『アラセア。…………でもね、スバルくん?』

「…………」

『自分の思いを言いつて、大切なことよ。そうね…………今日の暁のこととか』

「…………」

『ウォーロックにいろいろ教えてもらったのよ、まあ、ウォーロック自身は何いってるのかわかつてなかつたけど』

・・・・・

もう、スバルはハープに負けていた。

『テキト君・・・だつたつけ？あの子のこと、けつじつ隠して
るんでしょ

気にするのは、別にいいけど・・・、後悔だけはナシよ。』

ハープは続ける

『女の子はね、押しに弱いのよ

いまはスバルくんのことが気になつてるから…ナビ…

もしトキトくんが、ミンラを押しおくれ、ミンラがトキト君
を好きになつてしまつたら

・・・スバルくんには、もつ、一度と振り向いてくれないかも
『しないんだよ』

「…………」

『テキト君はテキト君、スバルくんはスバルくん

もし、スバルくんが、ミフラーのことを想つて一緒にいたいと思つのなら

ちゃんと、ミフラーに言葉で伝えなさい。』

『じゃあ、ワタシ、もういいかが木むかい。じやあね』

「・・・・・」

「・・・・・ハープ

『なに?』

「…………ありがとう…………」

「…………フフッ、それでいいのよ

スバルとハープ（後書き）

若干？ほんと、話のつじつまがあつてるかな？
とにかく書き続けて、文章力鍛えていくんで、よろしくお願ひします。

「ウォーロック～～、起きて～～、仕事よ仕事～～～」

『・・・ん・・・・まだ朝の4時じやねえか。』

「今日の撮影は移動の時間がかかるのよ、せつ、起きて」

四庫全書

「……………。」やがて泣き声からね。」

『おまえがウイザードのアドバイスすじやあ、いいじやねえか・・・』

「だ～～か～～ら～～、このハンターV Gはハープにしか反応しないの！！！」

だからウォーロックがうづかないと・・・」

『カーッめんどくせえ。わかった、わかった。はいりやあいいん
だろ、はいりや。・ほりよ』

・・・シユツ・・・・

「あ――――つ、朝からイライラする――――つ

『…………』

ウォーロックは、そんなミソラを罵罵罵、再び寝始めた。

「…………えつ、もつこんな時間ー？　はめくこかないヒー？」

とにかく準備していたバッグを詰め、急いで出て行こうとしたが

「いらっしゃ～す」

たとえ急いでても、これだけは忘れないミソシラであった。

~~~~~数分後~~~~~

「ハアハア・・・・、やつとついたよ。」

しかし、ミンラは肝心なことに気がつく。

「あれっ、ウエーブライナーって・・・・、いつ出るんだっけ？」

しかし、いまミソラ以外にいるのは、ウイザードのウォーロックだけだ。

「ウォーロック起きて、起きてつづけば

・・・ZZZ・・・・

「もう、役に立たないなあ。・・・仕方ないけど、こうなつたら・  
・・・

~~~~ピッ、ピッ、ピッ、プルルツ、プルルツ・・・・ガチャつ

『ん~、な~、ぢづしたの?』

「ぢづしたの、じゃないわよ。ウエーブライナーの時間調べてち
ょうだい」

『朝からぢづしたの、//ソラぢづなこみみ~』

「ウオーロックが寝たまんまなのよ、ほんと起きないんだから。
で、時間は?」

『…………よ。まあ、落ち着いて。』

「…………うん、わかった。で、そつかねえの？」

『言わねなくてもちやーんと、スバル君に仕込んでおいたから』

「え・・なんか言ったの」

『ふふふ、まあ今田の楽しみにしておいて。じゃあね』

「ちよ、ちよっとハープ、どうこういひと、ねえ、ねえってば」

ツー、ツー、ツー・・・・・

「それぢやつた

~~~~~ 4 時間後~~~~~

「あ～、やつぱサイロ～」

『……んん～、あれ、こいつはビンだ』

「シーサーライランドよ。修学旅行で来てたじやない。」

「ああ、たしか来たよつな」

〃ヒルカちゃん

「浦方さん……！」

「久しぶりだねって、そうでもないか

「なんでここにいるんですか？」

「ああ、チームミソラとして、ミソラの初の映画出演をサポートしないわけにはいかないだろ！」

「そりなんですか？またよろしくお願ひします。」

「ところで・・・ハープはどうしたんだ？いつもなら挨拶で姿みせるのに」

『・・・・・あ？』

「えええっ、なんだウォーロック?..」

『なんだ、浦方じゅねえか』

「カホーロック、おこりつこへー..」

『ふん、めんどくせえ・・・散歩してくるわ』

ウォーロックは勝手にウィザードにして、ビルかへ行った。

「うわ～～～～～～～～

「も～ウォーロックつたりー。浦方さんも手伝ってくださいよ～

「ははは、いめどいめど。でさ、なんでハープがウォーロックになつてるの?」

「それは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんですよ」

「そうだったのか。」

響さん、浦方さん、打ち合わせやるんだ」つむぎにあてぐだれ

~~~~~そして・・・

・・・とこづ」となんですが、少し変更がありまして、

「変更って、なんなんですか」

浦方が尋ねと、監督が

「実はだな・・・・・溺れ役担当の三中君が出演を拒否したんだ。

」

「なぜなんですか

「昨日電話が来て・・・・・

・・・そのときだった

三ツ星ラーメン

「ウオーロックーへ」¹したの、そんなあわてて

『こんなトコで油売つてゐる場合じやねえぞ、とにかく急げ』

「なんでいきなり・・・

『説明はあとだ。はやく行くぞ

・・・・・ ブルルツ、ブルルツ

ミソラのハンター→Gだ。

「どうしたの、ハー・・・・・

『ミソラ！大変なの！スバル君が、スバル君が……』

ブツン・・・・・・

「ミソラちゃん、早く行つて来い。
ウォーロックが言つてるんだ、ハープにも何かあつたはずだ。
責任はおれがとるから、早く・・・・・行け！――」

浦方が促す

「ありがとう、浦方さん・・・

ウォーロック・・・・行くよーーーー！」

『じ、コダマタウンへ、急ぐN』

日常生活？（スバル&ハープ）

「…………ふあ～～～～～、ん？…………え～～」
「…………つ」

・・・・・スバル～～、チコクするわよ～～～

下から母の呼ぶ声が聞こえる。

時間はすでに8時を回っていた。

スバルに残された時間は、あと15分

「・・・あれ、ハープは？」

・・・はやくしなさい

「はい

いつもだとウォーロックがしつこく起きててくれるが、今日はいない・・

～～～10分後～～～

「いってきま～す

スバルは最低限の準備をした。
もちろん朝食を食べる暇はなく・・・

グ～～～～ツ パパ、パ～～～～ツ

「腹減つたあ

～～～キーンゴーンカーンゴーン～～～

「ま、間に合つたあ~~~~」

ガラガラ~~~~~

「スバル、おせえぞー！」

「ふふふ~つ、ぼくの計算によると100%寝坊ですね~」

ゴン太、キザマロのシッ ハリが飛ぶ。
だがまだスバルにとっては、ましなほうであった。

「星河くん？あなたの寝坊グセ、委員長としては許せないわね」

口調は落ち着いているが、底知れぬ恐ろしさがあった。

「そうだわ、冬休みにあなたのために、合宿に行きましょ。」

「いいんぢょう、行くつてビニにだよ」

ゴン太が聞く。

「それは、今から考えるのよ。ちよつといいわ、あと二ヶ月で卒業だし。

思い出作りに最適ね。」

全員席に着け～

キーンゴーンカーンゴーン

1 時間目終了後

「スバル）、次体育だぜ！早くいこうぜ」

「ゴン太。・・・先行つといて」

「わかつたぜ。早く来いよ」

そして、スバルは歩き出した。

(ハープはどうにいったのかな・・・)

・・・・・スバル君、逃げて！――！

「え、どこにいるの？ハープ！」

『星河スバル・・・おまえだな・・・』

「あ、きみは、だれ」

『ふふふ、我が名はエンペル、次期FM星の王だ』

「エ、FM星の・・・・・王?ケフェウスは・・・」

『・・・おっと、おまえはこれ以上知る必要はない
・・・人質のおまえにな!!!』

・・・ミソラ、大変なの、スバルくんが、スバルくんが・・・

ウツ・・・・

『まだ意識があつたとはな、とりえず・・・・一つ取引をしないか?』

「・・・・なにをするつもりだ・・・」

『 なうに、簡単なことさ。

俺はだれとでも電波変換できるんだよ。
そこでだ。おまえに選択権をやる。』

「 . . . 」

『 お前が人質になるか、ハープが消されるか、だ

「…………！？ なんで」

『スバル君、わ、わたしはいいか・らはや・・・く』

ガニッ！――！

バタッ・・・・・

『・・・・』

『まだ意識があつたか・・・・さあ、早く選べ。今度はこの場所を消すぞ！――！』

「ハープ…………！」

「ぐつ

(ハープがいなくなれば、ミソノちゃんが悲しむ……
もう、そんなミソノちゃんは……もう……)
見たくない)

「・・・・・わかった。ぼくが・・・・・人質になる・・ただ」

『なんだ?』

「誰も、キズつけないでほしい」

『わかつた』

『んな』と守れるか

シユウ・・・・・

「ウツ・・・うああああああああああああああああああああああ

』

『フツフツフ、なかなか居心地がいいな・・・・さて、ウオーロックを探すか・・・』

日常生活？（スバル&ハープ）（後書き）

若干編集し直しました。 文字を打つのが遅くてすぐにタイムアウトしてしまって。

WAXA日本支部～

「大変です、長官」

「どうした」

「「ダマタウン上空に強い電波反応が！」

「…しかしそだ原因がつかめておりません」

「はやく調べてくれ！それから、暁をコダマタウンにむかわせろ

「それが…・・・もつ向かってるんです」

「・・・・・さつはつまつ、暁くんらしいな、って笑つてる場合
じゃない。

調査を続けよ！」

「ダマタウンへ学校へ

「スバルくん、どこですか～」

二ガテな体育を今日も見学するキザマロが、委員長の命令で探しに来た。

「あつ・・・・・」これは・・・・・スバルくんのハンターV G ! !

・・・なんでハープさんがこりにー?ビリしたんですか?」

・・・・・反応がない、ハープは倒れたままだ・・・・

「・・・・・せんせ～～～～い」

「・・・とにかくWAXAに連絡だ、はやくしおーーー！」

「いや、その必要はない」

・・・あ、あなたは・・・

・・・・・

『シジウ、あなたが食べていらぬから一こんなことになってしまった
のですよ』

「まあ、やつこひなよアシッヂ。」

「むむ、このひとはもしかして・・伝説の遊撃隊隊長、暁シジウ
さんではないですか」

#ザマロの辞書に載つてないものはない

「ははは、うう、この私が、メテオG衝突を阻止した、その名も・
・

『シジウ、本部から連絡よ』

ピッ・・

「シドウ君、原因がわかったか」

「はい、おそらく・・・この電波は地球のウイザードのものではないと思われます」

「わかつた。事件の可能性があるからゴダマタウンの住人を全員避難させる

そして、現場の電波物質を集めて転送してくれ

「わかりました。あと・・・スバルくんのハンターV Gが・・・

「スバル君の身に何かあったのか?」

「・・・ハープが現場付近に倒れておりました。

おそらく、なにか知っているだろうと思われます。」

「わかつた。では、ハープも頼む。では、あとは任せたぞ」

隊長（後書き）

すみません。
セクションのタイムオーバーがこわいので、文章を短くしました。

ウエーブライナーの車内~~

「ウォーロック、いつたい何が起つたの？」

『感じたことのない電波を感じた、おそらくこの電波は・・・』

ピンポンパンポン——

ご乗車いただきありがとうございます。

次の停車駅は「ダマタウンですが、現在避難勧告中のため、
WAXA—ホン支部に臨時停車いたします。
もう一度繰り返します＝＝＝

「ウォーロック、どうしたらいい？」

『・・・待て、何かが来る』

バリ、バリバリバリ・・・ん?

「ひねじぶり、ミンカラちゃんじゃないか」

「シドウさん、いつたい何が起にったんですか?」

「ハナシはWAXAでしょう、今は人手が必要なんだ。・・・それから・・・これを」

「・・・・・ハープ、ボロボロじゃない!何があつたの!-?」

『おー、ミンカラ・・・そのハンターVG・・・』

「ウォーロック・・・あつ、レ、これ、・・・スバルくんの・・・」

『おい、アシッド、スバルはどこなんだ』

『・・・現在調査中だ・・・』

そのとおり・・・

『//、//ソラ・・・』

「ハープ！ねえ、いつたい何があつたのよ。スバルくんはいつた
い・・・」

『ス、スバルくんは・・・ヒンペルとかいうやつと・・・電波
変換して

・・・・・・・・・・・・・・

『とにかくいつてしまつたわ・・・』

「……………？」

『やつぱあにつか』

「ウォーロック、なんかじつてるのー？」

『ああ、やつは俺とおなじ……FM星に故郷を滅ぼされた
その星の娘は・・・・・・PM星』

「・・・・、ウォーロック、そのハナシ詳しきかせてくれないか・

シドウが言った。

「

『ああ。PM星人はな、昔、AM星、FM星以上に発達していた。

俺たち電波体系の惑星で最強のホシだつた。

FM星はそのころから、ケフェウスが支配していた。

そのころの電波体系のホシは平和だつたんだ。

しかし、あるとき・・・・・・

P.M星（後書き）

まだ続きます。
タイムアウトの関係上。

『FM星は、ケフェウスが支配していた。

そのころの奴は、まだ他人を信用することができていたんだ。

だが、ある奴が、ケフェウスの知らないところにある兵器を作っていた。

その兵器こそアンドロメダ。

しかし、アンドロメダはどう見てもFM星の技術で作られた物ではなかつた。

そう、アンドロメダはPM星の当時最先端の技術でつくられたものだつたんだ。

しかし、その事実を知らないケフェウスに、ある事実が舞い込んできた。

PM星、FM星の謀略によつて滅亡・・・・

その事実を知つたケフェウスは、犯人を捜した。

しかし、その犯人は・・・・・当時、王の右腕だつたランバルだ
つた

ケフェウスはもつとも信頼していたランバルに裏切られ、処刑し、

以後、誰も信用しなくなつた。

そして、AM星がFM星を制裁しようといふ噂を知ったケフェウスは、

アンドロメダを使い、AM星を含む電波体系の惑星を、滅ぼしあた・・・・。

おそらく、故郷を奪われた怒り、憎しみで、エンペルは何かたくらんでるんじゃねえか？

まあ、なんでスバルに電波変換したのかは、謎だがな。

『

ウエーブライナーは、NAXA一ホン支部に到着した。

帰ってきた男

「シドウちゃん、まつたわよ。せつ、長官、会議、始めましょ
う」

「では、会議を始める。まず、ヨイリー博士から、よろしくお願
いします」

「空気中の電波物質だけじ、このホシナシでFミ星人のものでは
なかつたわ。

あと、スバル君だけど、このことに関しては、ハープちゃん、
ヨロシクね」

『はい、それは9時』＼＼・・・・・

ハープは知っている全てのことを話した。

エンペルは、ウォーロックを探していたこと
だれとでも電波変換できること

そして、スバルがハープを守るために血りを差し出したこと

・

「ハープちゃん、ありがとね。

あと、困ったことに、これだけしか情報がないのよ」

「ヨイロー博士！」

「なに？ シドウちゃん」

「ウォーロックがエンペルについて、何か知っているようですが
・

『それ、さつきハナシしただらうがよ』

「ウォーロックちゃん、話してちょうだい。

情報はできるだけ共有したほうがいいわよ

『うわあ～～やめてくれ、その呼び方。背筋がぞつとするんだ

「だつたぢ語じてちゅうだい、ウォーロックちゃん

『わかつた、わかつたからよ、その呼び方ほせめてくれよな
『みよな

・・・・・

『これはな・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・だよ

『会議終了後～～～

『あ～あ～、帰るぜ俺は

「なつとまつてよ、ウォーロック。狙われてるのよ

『//ソラのこいつおつよ、待ちなさい』

『…………わかった・わかったからよ…………だから…………

…………泣くのはやめてくれ…………

「だ、だつて…………うう…………」

ミソラが涙声で話す

「ス、スバルくんが、もう帰つてこないのかもしれないんだよ

「そんないとなじや…………」

3人の前にあらわれたのは・・・

「えっ・・・・・もしかして・・・・スバルくん?」

「ただいま・・・・・・・・」//フランちゃん

「す、スバル君・・・・・・」

「じめん、心配かけちゃって」

スバルがミンラに近づいていく・・・

『ミンラ…………逃げて…………』

「えつー?」

ロングソード

ザシユツ・・・・・・・・・・・

『ミンラ…………逃げて…………』

『へ、へめえ、どいこいつだ……』

帰ってきた男（後書き）

すみませんタイムアウトしちつで、内容が・・・

最後の抵抗

『三二二・三三三』

・・・・・反応がない

「まはまつ、おじいこた？もうこいつの体の主導権は俺にあるんだよ」

『・・・なんで攻撃した・』

ウォーロックの問いかけにも・・・

「愚問だねー、俺以外に電波変換されたら邪魔じゃないか」

『ウォーロックー・ミンラは任せでー。』

・・・シユツ・・・

「だめだよ、そんなことしちゃあ。」

・・・

・・・

「一緒にあの世へ逝つてきなよ

『ハーハーブツ！！！』

バトルカード キヤノ・・・・・・ウツ・・・・

(・・・・ハープ、逃げて、ミソラちゃんを・・・・・)

『エツ？』

「クツ、いつたん退却だ・・・」

『待ちやがれ、ブツた切つてやる』

・・・・・

『・・・・・俺は、スバルがいねえと何もできねえのか・・・』

「～～～宇宙空間～～～～」

「ふん、いいところを、邪魔しやがつて」

(せつたいにさせない)

「？・・・ああ、わかつた、わかつた」

(なにをするつもりだ)

「・・・お前の人格、知識、記憶、全てを・・・・消してやる」

(せりたいに・・・これがもんか!ーーー)

「おいおい・・・そんな抵抗は無駄だぜ！・・・ハアツ！？」

1

「……………どうだ、 気分は」

(……………)

「話し方も忘れてしまったのか、ハハハ」

・・・・・

「くっくっくっく、これでFM星を滅ぼせる
・・父さん、見ていてくれよ。敵を討つてやるからな」

出来る」と

病院~~~~~

「ミソラちゃん、大丈夫」

ハープは電波体であり、病院の機器に誤作動を起こしてしまつ恐れがあり
代わりにスバルの母が付き添っている。

「・・・・・」

(まさか、スバルがミソラちゃんと攻撃するなんて)

・・・・・

(ミソラちゃん……ちゃんと田を覚ますのかなあ……

お願い……生きていこ)

病院の外

『ミソワ』

~~~~~WAXA=ホン支部~~~~~

「長官、シドウひやん、結果がでたわよ」

「……………」れば……

「Hンペルの電波反応を基にして分析したのよ。  
この動きだと……FM星でしょうね。」

「……」

「いま、FM星には地球からの使節団が滞在しているわ。  
その宇宙船とこことの電波をつなぐことができれば……。」

「それは、いつ・・・できるんですか」

「あら、いい質問ね、シドウちゃん。  
こっちからだけでやつたら、丸一日はかかりそうね。  
そうだと、こっちが行くころにはもう、ＦＭ星はなくなってる  
かもね」

「ヨイリー博士、何とかならないんですか?」

「使節団のメンバー表をみて、いらっしゃい」

「・・・・・星河 大吾・・・・・天地まもる・・・・・

」

「この二人と協力すれば、3時間ぐらいでできるわ。  
でも・・・・・ＦＭ星にいけるのは、一人だけよ」

「なんで

「もういのよ、たぶん一回踏むと、道がくずれていいくわ  
だから、その1人のメンバーを選んでちょうだい。  
それが、今のあなたたちにできる」とよー。」

「わかりました・・・では・行つてまいります」

出来る」と(後書き)

誰がしゃべってるのかがわかりづらいかもしません。

決意

病院の外~~~~~

『ハハハ・・・・ミミラ~~~~~』

『・・・・・ハープ、泣いている場合じやないぜ』

『何なのよ、ウォーロック、あなたには私の気持ちがわからない  
のよー』

『エンペルがFM星へ移動している・・・』

『えつー!?』

『・・・・・FM星に行つてくる』

『なんで？あなたが行つても無駄よ、戦えないでしょ！？』

『・・・・・今の俺にはな、お前の感情がわかるんだよ・・・

スバルと過ごしているうちに、今までわからなかつた他人の気持  
ちが・・

・・・・・お前がミソラを心配しているよ・・・

俺もスバルが心配なんだよ。それに・・・』

『・・・・・それに？』

『FM星人と地球人との間には、ブラザーバンドがあるんだ……

…………スバルと大吾が結んだな……

俺は……スバルのウィザードとして、その縛を守りてえんだ。』

ウォーロックは、すでに腰を上げていた。

『…………わかつたわ、じゃあ私はミンラを待つわ

…………地球は任せといて！』

『…………じゃあな！』

――――――ウオーロックは飛び立つた――――――

～～～～～そのJUN・・・WAXA一ホン支部～～～～

「シドウちゃん、決まつたの？」

「はい、俺とアシッドで行くことになりました」

「……………そう、でもね……………ちょっと遅かったわね」

「どうこう意味ですか」

「……………だれかが、このウエーブロード上を使つてゐるわ

「……………誰がですか」

「」の反応はおもろく……………

~~~~~病院・中~~~~~

(ちょっと飲み物買つてこよつけな)

「…………よし、スバルのお母さんには悪いけど…………」

運よくハーフリの部屋は1階であったため・・・

「」の窓を・・・・・

ミソラは難なく窓枠を飛び越え、

『……………』

ハープッ！――――！

『……………』

「あなたたちの会話丸聞こえよ！」

・・・・・ウォーロックを追いかけるわよ、さあ――」

『・・・・・それは無理よ・・・』

「なんですよ、ハープ、いいじゃない」

『…………無理よ…………こまのあなたじや』

「大丈夫よ、傷なんでもう治つたし」

『…………』

「ねえ、ハープ、なんで、なんでダメのよー」

『…………助けたい気持ちはわかってるの

…………でも、これ以上無理したら、あなたの体が耐えられな

いわよ』

「死ぬ覚悟はできているわ・・・だから・・・お願いつ!!

「ハープ？」

『ミンツ・・・・あなたには負けたわ・・・・・・』

「・・・じせず

『ただ・・約束して。

もし、あなたの体が耐えられなくなつたときは、電波変換を解くつて』

『うん、約束する』

『じゃあ、いくわよ』

「電波変換、響ハソンフ、オン・エラーー。」

シユツ・・・・・

・・・その二ひる、病院・中・・・・

(ミソラちゃん、どうなのかな)

ガラガラツ・・・・・

「やつへこなくなつてゐる、ヤリヤリヨコの、ハツカサヤー？」

「 」」」が宇宙かあ・・・・

『 うひうひよーーーー』

カツ・・・・・・

何かが光つた、すると・・

「・・・・・・・・・・・・ダレだ・・

「えっ、あっ、あなたは・・・・・」

『・・・・・ブライ！！！・・・・・なんでコレヒ』

「フン・・・・・・・・・

パシコン…………

ブライは一瞬で消えていった・・

「見て！ハープ」

『道は…………ウーブロード？』

「…………消えていく・・・・・

』と元気へ急ぐわよ、リヒト

「
え
え
!」

WAXA—ホン支部

現在、3つの電波を確認、

「ブライちゃんね

「八、ハイ」

「アーヴィングさん……」

「はい！」

「今すぐ準備して！」

「こんな」ともあればかど、秘密兵器を用意しておいたのよ」

「秘密兵器・・・?」

「うなつたら、宇宙船に直接アシッド・ホースを送り込むわー。」

秘密兵器（後書き）

今とにかく書をもくつてます

助つ人（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。
おかげで、アクセス数が6000を突破しました。
これからも更新するんでよろしくお願いします。

助つ人

F M 星~~~~~

「……天地君、状況は？」

「いまのところは・・・・・・あつ、
・・・なにかが近づいてきます」

お~~~~~い、大吾~~~~~お

「ウオーロックじゃないか、よくきたな」

『まあ、』『まだ住んでたからな』

「ははつ、そつか。』

『といひで何してんだ』

「ああ、今わざWAXAからの通信で
敵が近づいているからそれをつけなさいね大吾ちゃん、つてきた
から

このホシに近づいてくるものを観測しているのを
でもこんなしゃべり方の人ってWAXAにいたつけ？」

『絶対にヨイリーだ！！』

「ヒーハでよ、ウォーロック」

『なんだ？』

「・・・スバルは無事なのか」

『・・・をあな。まあ、俺はスバルを追つてきたが
まったく波長が感じられねえ・・・』

「そうか・・・」

ウォーロック――

『ハープじゃねえか、いいのかっこに来て』

「ウォーロック、私なら大丈夫よー。」

『ミソラが、どうしてもスバル君と居たいからって』

「あ～、君があの響ミソラちゃんか～」

「大吾さん、お久しぶりです」

「スバルからハナシは聞いてるよ

「へえ、そうなんですか？」

「・・・大吾さん、来ました。奴です」

『ハツハツハ、久しぶりだな、大吾よ』

「そうだなあ、エンペル。まさかこんな形で裏切られるとはな・・・

『裏切る？ふん、裏切ったのはケフェウスの野郎だぜ・・・
・・・おや、そこにいるのはウォーロックじやないか・・・』

『ケツ、さつさとスバルを返しやがれ！』

『まあ、待て。こいつはな・・・・・』

・・・・ブライナックル！――！

ガーン・・・・・

『クツ、おまえは・・何者だ』

「……………ブライ。ロックマンを倒すのは、この俺だ！……！」

一
つ

『・・・・ハツハツハツ』

「何がおかしい」

『さつきの攻撃が俺に効いたとでも?』

「どうこうことだ」

『AM星人やFM星人のような、劣った電波体にはわからんだろう

俺を含むPM星人はな、ダメージを全て・・・・・

・・・電波変換する媒体が受けるんだよ』

・・・・・

『おい、大吾、どういふことだー?』

「・・・・・つまり、やつが受けたダメージはスバルが負うといふことだ』

『・・・・・クッ、大吾・・・いつたいじりすりやいいんだ』

ウォーロックはいつになく苦悩した様子だ

「ひとつ・・・・・方法がある・・・・・」

・・・・・

「・・・・・ウォーロック、おまえがスバルの中からエンペルを倒す
・・・・・それしかない・・・・・」

『・・・なるほどな・・・・

それで俺がスバルのカラダをのつとりやあいいわけか』

「・・・・・いぐぞ、ブライ、エレキスラッシュユーーーー！」

『ふん、ござかしい、ラプラス！！』

『ラプラスが剣の形に変化する・・・

『ラプラスソードっ！！！！』

ガキン！

「大吾さん、できましたー！」

「ナイスだ、天地！ウォーロック、行くぞーー！」

『・・・・何をするんだ！？』

「宇宙船の電波通信装置を利用して、お前をスバルに転送するー！」

『…………もひるわりか？ ブライくん？』

「…………油断したな！」

！-----！

「プライアーツストレー、フック、アッパー……」

・・・・スバルのカラダにめり込んでいく！！！

「転送準備率、70、80、90パーセント……100%……」

「今だつ――――」

「いけえウォーロック！――スバルを取り返して来い――！」

『まかせとけ――』

「転送――」

パシユツ！・・・・・

ウォーロック vs ハンペル

・・・・・スバルの体内・・・・・

『ここか・・・・』

キャノン！-！-！

『ウワッ・・・・・アブねえ』

『チツ、外したが』

『・・・・・エンペル！-！-』

『ビリヤッてきた！-？』

『ファン、誰が教えるか！』

『ファン、誰が教えるか！

『それは無理な提案だ、
このカラダにはまだ働いてもらつ・・・』

『わるいがそれはできないぜ！

俺が入ってきたからには、お前の好き勝手させねえ！

スバル~~~~! どこだ~~~~~! ! ! ! 『

『それはどうつかな?

・・・「この全ては・・・消し去つた』

『じゃあ、お前をたおすまでだ！――

ウォーロッククローー！ー！

『ハレキスラッシュ・シップ』

キーン・・・・・

(・・・・・何か聞こえる・・・・・)

『・・・クッ、分が悪すやれる・・

『フフフ、さつさまでの威勢はビビに行つた、ウォーロック』

(・・・ウォーロック・・・・?)

『まだだあ！――スバルを返せ！――!』

(· · · · スバル · · · · そうか · · · ·

ぼくを・・・・・助ける・・・ために・・・・・

俺はFM王を倒し、王となる…………『

(・・・・ウォーロックが・・・・・危ない！！！)

□・・・・ここまでかつ・・・・□

「な、なにが・・・・・・・・・」

「ウオーロック！－！－！－！」

『ス、スバル！！！』

「ぼくは大丈夫！――早く逃げ――！」

・・・・・ エンペルは・・・

「・エ・エンペルは・・・も、もう・・・すぐ・・・
や・・・」

『スバルツ！・・・クツ、拒否反応が・・・おれにも・・・』

パシュン――――

「ブライ、大丈夫！！」

「・・・・・フン、」

『なによ、ミンラが心配してあげてるのにつ』

ヒュ――――ン・・・・・・バ――――ン

『ウォーロック！――！』

「スバルくんは・・・・・・」

『ああ、もう・・・心配ないぜ、

だがな・・・・・・』

ウォーロック・サンペル（後書き）

タイムアウトです

行け！！！

「だがな、つて何？教えてよウオーロック！」

『……あれ！』

ハープが叫んださきには・・・・

「……ソラちゃん」

「スバルくん！！！」

バタツ

倒れたスバルにミソラ達は駆け寄つた・・

「意識がない・・・・」

すると、大吾も駆け寄つてきて・・・・

「・・・・・・・・大丈夫、まだ脈はある・・・・

『とにかく・・・どこか安全な場所に』

「そうだな、ハープ・・・・・

よし、ミソラちゃんは天地と、スバルを宇宙船に運んでくれ

「はい、わかりました」

「よし、任せた！」

ウォーロック！――！」

『なんだ？おれは宇宙船には帰りねえぞー。』

「……俺は、このホシのグラザーバンドの責任者だ

…………一緒に戦つだー。」

『…………わかつたぜ、よじ……。』

「待ってください、私も戦います！」

ミツリせぬつた

「いや、ミツリせぬつた、スバルの側にいてくれ。」

「で・・・・でも・・」

「また、FM星人が襲つてくるかもしれない。

「・・・・そのときに、スバルを守つてやつてくれ・・頼む！」

「・・・・・・・わかりました

「ただ・・大吾さんも、絶対戻つてきてくださいね！・！」

『ケツ、俺はなしかよ』

『ウォーロックもよ』

ハープがフォローする。

「わかつた

「ウォーロック、いまエンペルはどうしているの？」

『…………FM王の面殿に向かつてやがる

・・・・・・・・・・急ぐぞ、大吾……』

「マテリアライズ、スカイボード！」

『そんなので俺のスピードについてこれるのか？』

「はは、このスカイボードはWAXA特製品でな、

最高で300キロ出るんだよ」

『まあ、たいしたことねーな。落ちて怪我すんなよ

・・・・・スピード落としてやつから・』

ピュ――――――――――

「うわあ、お前がやるの？」

行け！！！（後書き）

なんとか今日でFM星編を終わらせるつもりです

侵入者

宇宙船内~~~~~

「…………スバルくん…………」

「…………よし、スバル君をここに乗せてくれ」

「…………ハ、ハイ…………」

ミソラは、天地の指示に従い、スバルを台の上に乗せた

「…………これは、何ですか？」

「これは、自動生命維持装置、昔で言つてAEDみたいなもので

のせた人の生命の維持を、自動で手助けするものなんだ」

「じゃ、じゃあ、スバルくんは助かるんですか？」

「まだわからない……

なんせ、けつこうなダメージをくらつてたからな……」

「…………」

バタツ・・・・・

『・・・・警備があまいぜ・・・・』

『…………ケフエウス！！！！』

『よくここまで戻ってきた・・・エンペルよ』

『あつやと首をよじかへ……』

『いじだらう・・・だがその前に私の話を聞いてくれ・・・』

侵入者（後書き）

すみません、編集の都合上短くなってしまった。

眞実

『昔、ランバルという科学者がいた

その科学者は当時、よの右腕のよつたな存在であった

よは、ランバルをとても信頼していた

だが、ランバルはよのみえない所で、ある計画をたてておった

・・・・・PM星滅亡計画・・・・・

そしてランバルはよの知らぬうちに

アンドロメダといつ兵器を作り出し・・・PM星を滅ぼした

そのことは知らず、濡れ衣を着せられたよは

犯人を調べ上げ・・・・・ランバルを捕まえ、処刑した

そしてよは、以後誰も信用できなくなつた

ランバルを処刑した後もよは極秘に調査を進め、・・・・

・・・FM星にランバルの息子がいることをつきとめた

しかし、行方がわからぬまま・・・調査は終了した

そして、半年前、FM星の政治的地位を駆け上がりつてくるものが
いた

・・・・・かつてのランバルのようになり

そして、波長をかんじたとき・・・・・よは確信した

ランバルの
・
・
・
・
・
息子だと

・・・・それが、そなだつたのだ。エンペルよ

『「へ、うそに決まつてゐる……」』

『いや、それは、そなたが知らされていなかつただけなのだ

そして、2ヶ月まえ、そなたは よ の右腕になつた

・・・・以前の よ であれば、訳もなく殺していたであろう

だが よ は、そなたを信じた、

・・・そなたの電波変換していた星河スバルのおかげでな

『う、うそだ、おれの父さんと故郷は、ケフェウスによって奪わ
れた

そうじて今まで生きてきたんだ・・・・・!

キイイイ～～～ッ・・・

「ケフェウス王！－！－！」

『ケフェウス！－！－いま、エンペルが・・・・・』

大吾とウォーロックが入ってきた・・・

『・・・・エンペルよ・・ よ を信じてくれ』

『うそだ、うそだうそだうそだあ／＼／＼』

『大吾、いつたい何がおこつてるんだ』

(さあな、ただ、もう決着がついたみたいだ・・・)

『も、もし、そのハナシが本当なら・・・

エンペルは涙ながらに言つ

真実（後書き）

タイムアウトです。 . . . 続きます

・ し訳ないっ！――ケフュウスをまつ――

「ハハハハハハ・・・・・・・・・・・・

もうエンペルには立ち上がる力もなかつた・・

下を向いたまま・・・ただ・・・泣き崩れている・・

『星河大吾とウォーロックではないか！

・ はまた、そなた達に救われた』

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

・・・・・大吾、スバル、ウォーロック。

そなた達の紹介してくれたブラザーバンドのおかげだ

すると、ヒンペルは立ち上がり・・・

『私は、王に刃向かつた。処刑をして、罪を償わせてください』

・・・・・ 罪を償いたいのなら・・・・・

・・よ の後を継げ

『・・・じ、どうにつけとしようか』

『・・よ のホシは、地球とプラザーバンドを結んだ

そして、今日、ついに完成した・・・』

・・・・

『・・よ にはプラザーバンドを固じゅつ、^{ササ}田^{ササ}うて^{ササ}の
めの

・・・・使命がある。

ブリザーバンドの第一歩は、国民に理解してもらひたいのだ

・・・間違つた理解をされないためにも

ナ 血ぬが國じゅうを歩き回つ、考えを説かなければならぬ

そのためには、こつまでも王の座にこなすことなのだ

だが、やむむは安心して任せらるる後輩がいる・・・

それが、そなたなのだ、エンペル』

『しかし・・・・・私は過ちを犯した・・・・』

『・・・・そなたの気持ちはわかつている

よ も過去に過ちを犯した・・・

しかし、そんな よ を許し、さらに信じてくれた人がいた

・・・そして、よ とブラザーになってくれた

・・・・ やつ ひまへ

よ はあなたを信じる だから あなたも よ を信じてくれ

そなたには王の資格がある よ が認めたのだ

あいつとそなたは よこホシにしてくれるであつて

だから・・・・・あとついでほしい・・・

『…………安心して、後はお任せください……』

エンペルの顔からほのかな微笑みが宿して、彼は迷っていた……

『ウォーロック、星河大吾、申し訳ない……

……星河スバルは大丈夫なのか?』

エンペルが素直に謝る

「……スバルは今……意識がない……

はやく地球で治療しなければ……」

『……よし、そなた達に宇宙船を分けよう』

そしてケフェウスは、部下に指示をして
宇宙船を運ぶよう命じた

「・・・その宇宙船だと、何日かかりますか?」

『・・・30分だ』

「や、30分!?」

大吾は驚いた。地球の宇宙船でFM星にいくには、1週間を費やす

『あ、はやく星河スバルのもとへ・・・

エンペルも彼らの手助けを・・・』

『いや、それは必要ねえ』

ウォーロックだ

「ケフェウス王、また来ます」

『ああ、頼む』

『ウォーロック、また来いよ

・・・星河スバルと

『フン・・・スバルが生きてたらな・』

・・・・富殿・外・・・・・

プルルツ、プルルツ・・・・・

「大吾さん！宇宙船が・・・いきなり運ばれてきて、それから・」

「まあ、そうあわてるな天地

スバル、ミソラちゃん、天地はFM星の宇宙船で！

地球の宇宙船は、俺とウォーロックで乗つて帰るから！

じゃ、頼んだぞ！」

「ちよ、ちよっと、だ・・・・・

ブツン――

「よし、ウォーロック、帰るぞ地球へ……。」

『新編夷語』

• • • • 宇宙船 • • • •

「十九」

「ねえ、ベジってある?」

『ソレナラ、ハハニ。テツダイマシヨウカ?』

「ありがと、」

よこしょりと・・・・・

「ハンパくんと一緒に、なんとか//ソラはスバルを寝かせた・・・

(あと30分の我慢よ、がんばって、スバルくん!)

そして、宇宙船は地球に向けて動き出した・・・

帰還（後書き）

FM星編終わりです。読者の皆さんのおかげで、アクセス数800件を突破しました。部数が多く、読みづらいこともあるとは思いますが、これからもよろしくお願ひします。ストーリー、あそこはこうしたほうがいい（効果音や人物の表現の仕方が下手なので、教えていただきたいです）など、意見や感想を待つてま～す。

あかねヒノンワ

「……………」

バツ・・・・・・・

『おせむり、//ヒノ』

「ハープ? ってあれ?」『おせむり。』

『いこはスバルくんの部屋よ』

・・ガチャツ・・・

「あひ、//ソラちゃん、やつと起きたのね」

「(スバルの)お母さん!」

「ふふふ、//ソラちゃんったら、寝すぎよ

もう、3日間も寝てたのよ

「み、3日ーっ!」

「そうよ、あなたつたらスバルを、私が運びますっ！」って

病院まで運んでくれたのはいいんだけど、スバルが手術室に入
つて

私と一緒にイスに座つて待つていたら、私を膝枕にして寝てた
のよ」

「へえ、そうだったんですか……で、スバルくんは？」

「スバルなら、まだ集中治療室にいるわ

けつこう重傷みたいで……」「

「……スバルくんに付き添わなくて良かったんですか？」

「それが、スバルがなんだか関係者以外立ち入り禁止ってところに搬送されて

スバルくんは大丈夫だからあかねさんは響さんはよろしくお願
いします、

つていわれたから……」「

「……そうだったんですね……」

「……ありがとね、ミソラちゃん、スバルを助けてくれて」

「……でも、わたしだけのチカラだけじゃスバルくんを……」

「ふふふ、あなたのそういうところが好きよ」

「……えつ……？」

「ふふふ、『飯でできているから食べなさい』

「は、ハイ」

時計は、正午を回っていた・・・

・・・プルルツ、プルルツ・・・・・

「はい、星河あかねですが・・・・・

・・手術が・・・・はい・・・・・・わかりました

・・・・ハイ――失礼します

「お母さん、どうしたんですか?」

「//ソラちゃん、ご飯たべたら、病院に行くわよー。」

「・・・・・といつ」とは・・・・・

「スバルの手術が終了したって

意識されもどれば、退院できるやつよー。」

「…………」

（…………や、やったあ——）

ミツリせんにはならないくらい喜んだ

やつとスバルに会える

冬休みになつたら、また2人でデートするんだ

パフエ・・・すき焼き・・・焼肉もいいなあ・・

「ミソラちゃん、顔こでてるわよ」

ミソラの顔は、笑みがほこりんでいた

たぶん、いろんなことを考えていたからであつた

「ふふふ、やつぱミソラちゃんはスバルのことが好きなのね」

「え、えつ・・・・・・! そ、そんな・・・・・・・・

だつて・・スバルくんの・・・ブラザーですから・・・・

ミソラの進んでいた箸がとまつた

かなり動搖していたらしい……

『ミンカラちゃん、ほおに米粒ついているわよ』

「…………あつ…………」

『ミンカラはスバルくんの「じとまかり考えていたのよねーっ!』

「へ、いぬせこなあ、ハープ』

『あひ、 図星だつた?』

「も―――っ」

ミソラの顔は、すっかり赤くなっていた・・・・・そして・・・

～～～～～ 2時間後 ・・・・・ 病院 ～～～～～

「502、502号室・・・・・」

ガチャッ・・・・・

あかねとミソラはスバルのベッドに近づき・・

「スバルつたら、まだ寝てるわ・・・」

あかねがスバルの顔を覗き込む・・

「じゃあ、なにか飲み物かってきましょうか?」

「いいわ、ミソラちゃん。私が買つてくるから、

「…」で見ていて

「…あ、じゃあ、お願いします」

…ガチャつ…

(スバルくん…)

スバルがいきなり体を起こした

「・・・・・」

「わあああーっ

・・・・・バサツ・・

(び、びっくりした～)

「ス、スバルくん…おはよう…」

「…………きみは…………だれ？」

「ハーリーちや～ん、飲み物買つてきたわよ

・・・・あれ、どうしたの？」

「スバルくんが・・・・・スバルくんが・・・・・」

「スバル、起きてたの、もう、心配・・・・・」

「・・・・? ? ? ? ? ?」

スバルは本当に何もわからないらしい

「……………どうしたらいいのかしら」

・・・・・ガチャツ・・・

「星河さん、ちょっと来ていただきたいのですが・・・」

スバルの担当医だった

「リソウちゃん、ちょっとスバルをお願いね」

「・・・・・ハイ・・・・・」

ミソラの心は再び地獄に落とされていた

怪我をしながらもスバルを助けるためにFM星まで行き

帰ってきて、やつとこれからスバルと遊べる・・・・・

しかし、スバルは自分のことを覚えていない・・・

「・・・うわああああ～～ん」

ミソリは、これまでためていた感情を爆発させ・・・

「ビ・・・ビビして泣いてくるの?」

「・・・グスツ・・・・・

ほ・・・本当に・・・なに・・・も・・・おぼえて・・・ないの
?」

「・・・ただ・・・・?」

「ただ、なにか大切なことを忘れているんだ・・・」

それだけしか・・・・・覚えてない・・・・・」

「・・・・大切な・・・・・・・・・こと・・・・?」

「・・・そう、なにかを・・・つたえないと・・・」

「…………つたえる…………？」

「ミソラちゃん、帰るわよ」

「え……スバルくんは？」

「スバルもよ」

・・・・・

あかねは医師に礼を言った後、ミソラ・スバルと帰つていった

「はい、ありがとうございました」

「では、何か異変があれば、また来てください」

「……………」

「なーんへー!! なぜかわざこわへー。」

「…………あの、お医者さんと、何を話してこたんですか?」

「ここよ…………あやじ、話してあるから

やれやね…………

～～～FM星～～～

大吾はFM星の造船技術を学ぶために、天地らが帰つてからも3日間滞在していた・・・ウォーロックと

そして、地球に帰るとき・・・・・

「では、FM星のみなさん、ありがとうございました」

・・・また来てくださいね・・・・・
・・・「駆走してやるぜー・・・・・

FM星の住人が見送りに来ていた

『・・・・といひで、大吾さん・・・』

声の主はエンペルだつた・・・

『スバルという地球人のことだが・・・』

「・・・どうしたんだ?」

・・・・・ 地球・・・

ヒーリー、スバルの脳の一部が・・・動いてない

「・・・脳が・・・動いてない？」

「動いてないっていつも、ちやんと生きてないの

ただ・・・その理由がわからなこりしこのよ

「・・・・・もしかして、その脳の一部ってこのせ・・・

「記憶を扱っているところですか？」

「様子を診たらそうじこいつ。

治療法はわからないんだけれども、病院にいても寝るだけだから、

家でいろいろことをさせて様子を診てください、だって。」

「……………そりなんですか……………」

あると//ソリが・・

「……………あよからしの間・・スバルくんと・・

・・・・一緒にいてもいいですか?」

あかねは満面の笑みで

「もちろんいいわよ、スバルの世話、頼むわね!」

「はいっーがんばりますー!」

＼＼＼＼＼そしてFM星＼＼＼＼＼

『スバルと電波変換しているとも……

・・・・・記憶を消そうとした

「・・・・・

『しかし、消すことほどぎなかつた、

だから俺は、スバルの記憶を一時的に麻痺させた

そのため、スバルが生きていてもしばらくは、記憶は戻つてこ

ない』

「……どれくらいで戻るんだ？」

大吾が聞く

『早くで10年、最悪一生戻らないかもしねれない……』

「……じゃあ、どうすれば……」

『……大吾さんがない3日間で、これをつくった

これは、スバルの脳に打ち込んだ電波と真逆の性質の電波を帶びた薬だ

これを飲ませれば、早く直せるかもしれん』

そう言つとエンペルは、カプセル状のものを渡した

「・・・・・ ありがとう・・・」

『ただ、副作用があつて、それを飲むと頭に激痛がはしる

だから念のため、副作用の軽減のための薬も作つておいた』

エンペルはタブレット状のものを渡した、すると・・・

『それって、バファンじゃねえのか』

ウォーロックは、相変わらず空気が読めない

「じゃあ、エンペル、そろそろ歸るよ」

『……じゃあ、スバルによりしへ』

『……おい、また無視かよ……』

いつも無視られ役のウォーロックであった……

付きつきり！

家にかえつて2時間後・・星河宅

現在の時刻：PM8時

「はあ～～～疲れたあ～～～」

ミソラは、スバルの部屋の回転イスに座った

「えつ？なんて？」

• • • • • • • • • • • • • • • •

スバルは無口のままだ。

どうやら、まだミソラに人見知りをしているらしい

ベッドの上の大きな窓から星を眺めている

「あれっ？」

ミソラが手に取ったのは、ミソラのCD。

（そつか・・・・・応援してくれてたんだ）

ただいま

下から大きな声が聞こえる

たぶん、大吾だ

「おかえりなさい、大吾さん

ロックくんも一緒にいたのね」

『……おフクロ、スバルはどうしている?』

「いま部屋にいるわよ、ミンカラちゃんと一緒に」

「……ウオーロック、まかせたぞ……」

『まあな、大丈夫だ、もつていつてくれるぜ』

ス――

ウォーロックは、スバルのいる部屋へと行つた

「あかね、ご飯にしようか」

「え、ええ」

スバルの部屋

「・・・・・」

スバルはホシを眺めている・・・・・

「ああ、どうしよう、ハープ？」

『うん、わからないわ・・』

スバル！！！元気か！！！！

『「うるせーこわよ、ウォーロック！」

もう夜の8時よ……』

「ハープ、まだギリギリ許される時間じゃないかなあ～

『・・・やうかじひへ.』

『スバルウ、薬持つてきてやつたが』

「…………わあ！だ、だれ！？」

（だいぶ頭がいつちまつてるな
まあ、少々強引にいくか！）

「があつ、な、なにすんのさあ～」

ウォーロックが、スバルの後ろから口を強引に開かせる

『上っしゃあ、ミソラーハープ！お前らも手伝えー。』

「ウォーロック、なにそれ？」

『クスリ、だよク・ス・リ、飲ませたら記憶が戻るらしい』

「ほ、ほんとに？」

『ああ、ホントだ、FM星で貰つたんだ

だから早くてつだえ～！～！

「・・わかつたわ、ハープも手伝つのよーー。」

『はーい

「ふあふあふあ・・・い、いたい、は、放せ～～～」

(スバルくん・・・・・じめんね)

・・・・・じくん・・・

『はあ～～～つ、やつとクスリを飲みやがったぜ』

「手～」わかった・・・

はあ～～～

スバルの部屋に、やつと静けさがもどった・・・・・

・・・・だがその平和はもなく破られる・・・

「わあわわわわわわわわわわ、あたま、頭が――――――

おきつあつ！（後書き）

タイムアウトです

「ス、スバルくん！？」

『・・・よし、今度はこれを飲ますぜー。』

そしてウォーロックは白い錠剤をとりだした、すると・・・

「・・・えっ、それってもしかして・・・・・

『・・・・バファン』

『違う、これは副作用を治すクスリだ！－！－！

さつわと手伝いやがれ！－！－！』

(・・・スバルくん、ごめんね)

うわあああああああああああああああああああつ・・・

~~~~~スバルの夢の中~~~~~

・・・・・スバル・・・・スバル・・・

「き、きみは・・・・・」

・・・・・もう・・・・限界だ・・・

・・・・・はやく・・・・助けに・・・・・

「待つてーきみがまた・・どうやつてこの時代に・・・・

「ウオーロック！！！！！」

『・・なんだ、スバルか・・・』

「・・・・・」

・・・・バツ・・・・・

『なんだ、記憶が戻ったのか?』

「うん!」

「…………スバルくん、いつたいどうしたの?』

下から声がする・・・

「えつ・きみは・・・・・・

「も〜〜〜オ」

(やつぱ、まだ記憶が戻ってないのか・・・・な)

ミツリはあいつたけのタオルを下に敷き、寝ていた・・

スバル~~~~起きなさい

「あつ、母なんだ」

は  
い  
・  
・  
・

「 . . . いつでもまへす」

スバルは元気よく学校へ向かった

・・・・バタン・・・・

「よかつたわ〜、記憶が戻ってくれて・・・

「・・・・・・・・

「そんな落ち込む」とはないわよ、//ソラちゃんー。

絶対に覚えてるから、スバルは//ソラちゃんの//ヒーロー

「・・・・ハイ

「・・じやあ、ミニラちゃん元気だしてもいいためにも

「付け終わつたら、買い物でもこましましょー。」

「ハイ・・・・じやあ、準備してきます・・・」



バファンのぐだり、またせつかりました

～～～学校・教室内～～～～

『さよはは人が少ないな』

「まあね、今日は早く起きたし」

『スバルに起されたる口が来るなんて思つてもみなかつたぜ』

ハハハハハ・・・・・

「あら・・・久しぶりね、星河くん

「い、委員長、ひやしぶり」

いつみても委員長のオーラはす」とい

「おい、スバル？ おまえ、ドコいつてたんだ？」

「いや、それが・・・・・・覚えてないんだ」

『ゴン太、なんなら、このウォーロックさまが教えてやるぜ』

キーンゴーンカーンゴーン・・・・

「すわりなさい！」

委員長の声が響く

ガラガラッ・・・

「えーと、今日は終業式で、明日から冬休みに入る。  
まづだな・・・・・・・・・・・・」

先生のハナシ、通知簿の配布・・・が終わり・・・・・

「では、今日はこれで終わる。

ぐれぐれも怪我だけに気をつけてなー！」

～～～放課後～～～

「星河くん、ゴン太、キザマロー。」

「は、はいっー。」

「なんだ、委員長？」

「・・・・・」

「前に言つてた冬合宿のことだけど、

私のプランを発表するから、いまからスバルくんちに集合ね

「え、ほくんち？」

「……いやなの？」

委員長の威圧感をひしひしとスバルは感じた・・・

「……ヒハハ、ほくの嫁でよければ・・・」

「わまつねーーじやあ、いくわよー。」

「うわああああ、スバルくんの……ばかっ……つ

「み、ミソラちゃん、落ち着いて……」（あかね）

「あの～、おなか、大丈夫ですか？」（店員）

「まだ20杯目よ、フジヤマパフェをちょうどいい……」

「は、はいっ！…！」（店員）

元氣（？）を取り戻したミソラであった・・・

「ただいま……あれ?」

「あかねさんは、留守?」

「…………そつっぽいね、まあ、上がつてよ」

・・失礼しまーす

・・・・・ぐるぐるぐるぐる

「なあ、スバル?なんか変な音がしないか?」

ゴン太が尋ねる

「…………たぶん……父さんのイビキだよ……」

「・・・やうなのか？」

「星河くんのお父さんがイビキかくつて、意外ですね」

キザマロが囁いた

~~~~~スバルの部屋~~~~~

「では、私のプランを説明するわ」

「クン・・・・

「・・・・・・・・ウキウキ地方の都市・古都を巡る旅4日間よ
！」

「旅なの？・合宿じゃなくって？」

「アリス、星河へん、一泊は合宿じゃないわよ

「旅よ、旅。まあ、たまにはリラックスしてもうつかと想つて
ね」

・・・・・・・・一同は黙つたままだ

「なに、せつない合宿がいいわけ？」

「いや、いや、そんなことないよ、ね、ゴン太？」

「おひ、スバル、そのとおりだぜ、な、キザマロ～。

「え、ええ、委員長がほへりのことを考へてくれてこるなんて・

ホントに光榮です、ね、ウォーロックへ。

『・・・・・なんでオレなんだよ・・・・・』

「じゃあきまつね！」

その旅には畠田からこくわよ

「えつ、畠田へ。」

「なー」「星河くん？やつぱつ、こ・・・・

「す、スバル、書は急げつてひりひり、こ・・・

「あ、うそ、やつだね！」「・・・・・」

「『コン太くん、なんか使い方間違えてるようつな、なこよつな・・・

』

「よし、じゃあ明日の時、カーブライナーの駅前集合ねー。」

・・・・・は、はい！

「じゃー解散！」

・・・・失礼しました――――

「あ～あ、明日9時か・・・」

『なんかあるのか、スバル』

「・・・いや、特にはないんだけど・・・」

・・・ただいま・・・

「ねかえり、かあさん。・・・あれ、もう一人の・・・

「ハジカラちゃんね。明日仕事があるから帰ったわよ

「へえ、そりなんだ。といふやうで、明日……」

スバルは旅のことを持った

「ねむじゅうじゅうじゃない、行つてきなやー。」

「たゞし、ミンカラちゃんに一言、声かけときなやこよー。」

「・・・・・ミンカラ・・・・・」

『昨日いたオノナだよ』

ウォーロックがフホローした

「ミンカラちゃんの」と・・・・・・覚えてないの?』

「うん、誰のことかもまったく……」

「…………そう…………。」

~~~~~再びスバルの部屋~~~~~

プルルツプルルツ・・・・・

「あっ、スバルくんじゃない、どうしたの？」

「いや、母さんが電話かけとけって言つから・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・

やつぱり、私のことば・・・・・覚えてないの？」

「う、うん・・・・・・・・・・・・・

「なんか・・・・・・・・・・・・・・」あん・・・

「……………？」……………い、いいよ

悪いのは…………スバルくんじや…………ない…………もん…………」

「…………」

「…………ご…………めん…………ね…………」

「…………かけ…………て…………あてくれたのに…………切るね…………」

ブツン、ツーッツー……

あひたなる危機？

「・・・・・ウォーロック」

『なんだ？』

「・・・ぼく・・・・なにか・・・悪い」としたのかな

『悪いこと？・・・・なにをだ』

「・・・・・やつぱいが。やつぱい」

『・・・・・』

『なに?』

「ハーブ…ハーブ…」

『…ミソラ…』

「わあああ～～～ん…」

『…』

『ミソラモ～～

「す……スバルくん……わ……たし……と……の……おも……い……で……ううう……」

『……ミンク、そんな無理しなくていいのよ……』

「だ……だつ……て……」

『大丈夫よ、スバルくんはちゃんと覚えてるわよ』

「……う……う……ううう……」

『……とにかく今日は休みなさい……』

「……う……う……うわあ~~~~~ん」

『 · · · · 今田の井の井田の田中 · · · · 』

～～～とある電腦世界～～～～

星河家

時刻 PM9時

「・・・・・・・・」

『スバル、どうしたんだ?』

「…………何にもないよ

・・・・・

「…………おやすみ…………」

～～～スバルの夢の中～～～

・・・・・たすけて・・・・・

「えつ、 韶は、 だれ？」

・・・・・まくは・・・・・ロックマン・・・

「・・・・・ロックマン・・・もしかして200年前の」

・・・・・さう・・・・・

… もうすぐで…  
… テが…

「え?  
」

… フ …  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…

「待つて、待つて、まだ・・・

バツ  
・  
・  
・

・・・・・ハナシが・・・・・」

『え、ハナシが?』

「…………いや、なにもないよ…………」

『…………なんかあつたんだろ…………』

「…………ちよつといつも、こめたいところがあるんだ…………」

『…………いいぜ、付合つてやる…………』

時刻は夜中の1時を回っていた…………

「……………！」

『……………海じやねえか』

展望台の先に広がる海…………

「ウオーロック、電波変換だ！－！－！

…………誰かが一いつ瞬くもべつてこる…………

『…………理由はわからねえが

…………おもしろいんだ、いくぜ…………』

「電波変換、星河スバル、オン・エア」

『いくぜ』

「海の中へ！！！」

シユ―――ン・・・・・

・・・・・

『リソル、もひき止んだらへ。』

「……」

『外の空気を吸つたら、なにか変わるかなって思ったけど……』

~~~~~海の中~~~~~

「い、これだ！－！」

『・・・・・』

海底のさじに奥にへと続く深い穴

「・・・・行ひ」

・・・・・

『 リンク、ほりつ、流れ星よー。』

「 ううう

『 . . . 駄目みたいね 』

スバルとウオーロックは、底の見えない穴を進んでいた

・・・・・そのときだつた！－！－！－

『・・・・・おい・・・・・スバル・・・・・』

「なー」

『・・・・・この海底には、とてつもない怪物がいそつだ・・・・・』

「えっ？ ビうこいつ」と、

『つまりだ・・・・・・・・・俺達は・・・・・

『……ほんに何が悪いんだよ、お前は……』

「…………いや、とにかくすまもつ……」

「…………のれやで、誰かがぼくをまつている気がするんだ……」

シユ——ツ

一人はさうに奥へとでもぐつていった……

ハコ

~~~~~海底~~~~~

「・・・行き止まりだ・・・・・」

『・・・行き止まりじゃねえ・・・・・そのハコだ!』

ハコは手のひらサイズで、表面に赤と青のランプが点滅していく、見た目はたいしたことないよう見えるが、そのハコの中にはおぞましいチカラがはつきりと感じられた・・・・・

「うーん、どうすればいいかなあ

『・・・まあ、触らぬ神に祟りなし、だ

『気にはなるが、これはそつとしておいたほうがいい』

「・・・わかった、じゃあ戻るね」

~~~~~ハコのなか~~~~~

『・・・・・チカラが・・・・・遠ざかっていく・・・』

『・・・・・テ・・・・・田覚めた・・・・・か・・・・・』

星河宅・朝

・・スバル～今日はルナちゃん達と行くんでしょ～～

チコクするわよ～～・・・

「・・・・・・・ハーヴ・・・・」

「・・・いってきまーす」

~~~~~ウヌーブライナー・駅~~~~~

『今日も早くついたな

「・・・まあね」

・・・・・スバルくん！――！

「えっと――・・・・・・・・

『ソンラ、ミンラー。』

「・・・なんで来たの？」

「スバルくんが、私のこと覚えてないから

これから、思い出作りにてつて・・・・・

「せつなんだ・・・じゅあ、あ、よひじくね」

・・・ハープ・・いつたい何を考えてやがる・・・』

『あーら、私はただ、スバルくんがミソラを忘れてるなら

もつこあじ覚えてもひいだまーいじやなーいつて書つただかよ『みすみす

フンボルト



## ハコ（後書き）

字数が少なくなつてしましました・・・すみません  
アクセス数1万突破しました、ありがとうございます。  
これからもよろしくお願いします

ワンサカシティ

～～～ウエーブライナー・中～～～

「…………へえ、そういうことがあつたのね・・・」

ミソラ、ハープは、スバルに何が起つたのか、FM星でのこと

委員長とキザマロは納得したが・・・

「・・・・・? ? ? ? ? ? ? ? ? ?」

ゴン太には理解できなかつた

1 時間後

「着いたわよ！」

着いたのはワンサカシティ、西二ホン一の人口を誇る

委員長の誘導で一同はコメダ日月に着いた・・・そして・・・

「…………なんでもやね～～～ん…………」

ハハハハ・・・・・

「あ～楽しかった、どうだった、スバルくん

「うん、おもしろかったよ・・・・

スバルはだいぶ、ミンラに口を開けるようになった

「じゃあ、つまむ・・・・

「いいんちゅうーおれ、ハラ減つてしまふやだ！――」

「ゴン太は食べることばかりね、まあ、いいわ、もう12時だし・

粉もんでも食べに行きましょーっ！」

「・・・・? ? ? ?」

「ほら、『」ン太くん、粉もんつてこいつのは、  
たこ焼きとかお好み焼きの『』ですよ~」

「・・あ・・ああ、じやあ、フンもんでもいくか！－！」

・・・ハハハツ

「なかなかおいしいわ」（ルナ）

「・・・バクバク・・・・」（ゴン太）

「あ、これ、いける」（スバル）

「ふふふ、やはり思つていた以上のおこしへですね」（キガムロ）

「は、はええ・・・・負けるか、うおおおおお・・・・」(パン太)

「フーッ、もうおなかいっぱい、勘定お願いします」（ルナ）

「…………32000ゼニーになります」

「…………だ、だれ！？こんなに食べたのはー！？」

「…………」（ミソラ・ゴン太）

その後も二回も三回も四回も回った。・・・・・

すでにあたりは暗くなっていた

「じつあ、あせで、」

・・・・・

「・・・・・」

「……えつ、じじつて……？……？ 球場？」

「アリヤ、今日まだ寝るの？」

「寝るって、いい

スバルが必死に食い下がる

「…………つこてきなさー」

・・・・・すば———

「Jリーグのワンサカドームは、冬休みにグラウンドをキャンプ場として

開放しているの。いいでしょー。」

「…………でも、ちょっとは考えなさいよ、これを使えばいいでしょー。」

「ゴン太、ちょっとは考えなさいよ、これを使えばいいでしょー。」

・・・・マテリアライズ、テント・・・

「・・・・わすが、委員長!」

「ゴン太くん、ちょっと考えたらわかりますよー。」

「じゃあ、ミンチちゃんと私は赤いテント、

星河くん、ゴン太、キザマロは青いテントね！」

・・・・はーい

「明日は早いから、早く寝るのよ——」

ワンサカシティ（後書き）

地名、わかりましたか？

カンベシティ 前編

~~~~~アマケン~~~~~

「あ、天地さん！」

「どうした、宇田海？」

「また・・『ダマタウン展望台沖のエネルギー反応が強くなっています！』

「・・・原因はわかるか？」

「いえ・・・ただ・・・・・」

「・・・ただ・・・・・」

「・・・」のエネルギーはビリヤード、電波物質でない・・・・・・

・・・・・スキャン結果が示しています・・・

「とにかく、WAXAに連絡しよう」

メールに添付するから、データを圧縮しておいてくれ!」

~~~~~ワンサカドーム~~~~~

「今田は……カンベシトイでくわよ

でせ、しゃうぱん——ひ——」

~~~~~一時間後~~~~~

「……悉く、ハハハ……」（ハニカム）

「ハリモーリヤタウン、やじてはガウルン球場よ。」

「やつせ、カンベシティに行へって……」（ゴン太）

「あくまでよ・て・い・を言つただけよ！」

「予定は未定。・・・それで、ここを本拠地とする球団は、どこの？」

「それは、板神タイターズですね

たしか最近10年間、ずっと世界ランキンギング1位の優秀な球団で・・・」（キザマロ）

「やうよ、キザマロ、そして・・今日はタイターズの・・

・・・・・ファン感謝祭なのよ

それで、あなた達には、ワタシのために……

・・・サインボールをひとつほしいのよ

「サインボール?」（スバル）

「そりゃ、」の感謝祭のメインイベントよ、

みんな・・・・・任せたわ!—!

・・・・・・・

ひゆう

あつ、スバル、そつちいつたぞ

「わああああ―――つ、助けてえ～～～」

スバルはルナに追いかけ回されていた・・・・

„*નોંધનોંધનોંધ*

「PM6時にここのでかい六角の屋根前に集合ね、おくれ・・・」

スバルたちは、ナンベンマチ、中華街にきていた

「・・・・よし、じゃあこれから自由に行動していいわよー。」

PM4時・・・・カンベシティ~~~~~（感謝祭は6時間あります）

「よつしゃあ、行つてくるぜーーー。」（ゴン太）

バビュー――――――・・・・

「ああっ、キザマロ、ゴン太につけこいくわよー。」

「ゴン太くんを一人にさせたら、どうなるかわからないですもんね」（キザマロ）

タツタツタツ・・・・

「・・・あゝあ、みんないつちゃつたね・・・」(ミソラ)

プルルツ、プルルツ・・・・・

「スバルくん!!」

「・・・天地さん？？」

カンベシティ 後編

「じつはね、海底から、あるハコがみつかった」

「…………」

（もしかして、昨日の……）

「でね、僕と大吾さんとヨイリー博士でそのハコ……

いや、プログラムを調査した……そしてその正体が
判明した」

・・・・・ゴクリ・・・・・

「……貴、無法者たちの住処として知られていた……

……ワラインターネットのフリーズデータだった……」

「…………なんで、僕に……電話を？」

「ハコが置かれていた周囲のデータを解析したら、

ウォーロックの電波反応がでたから、なにか関係があるのかと……
「…………もしかして、スバルくんはもう見つけてたのかなって思つて」

「…………」

『オレがひまつたから、テキトーにダイビングしてたのや』

「そ、うな、の、かい？スバルくん？」

「…………は、はい」

「ははは、そ、うだつたの、か、こ、ち、うの、思、い違、いだつたの、か」

「…………」

「じゃあ、協力ありがと。」

「失礼します」

・・・ブツン・・・・

「ウオーロック、なんで・・・」

『オレはさつさと中華街を楽しみてーんだよ

・・・ホラ、あのオンナがまつてゐるぜ』

「うん」

(カラインター ネット・・・・・・)

「スバルくん、早く行くよ～」

「・・・・うん・・」

「～～～～中華街散策が終わり～～～～」

「よし、次はレミルミエにいくわよー」

「レ・・・・・？」

「ゴン太くん、レミルミは光のイリュージョンのことです……

200年以上前の大地震の教訓を後世の人々に伝えていこうつていう

モニコメンツですよ

「イヤ、…………モニ…………？」

「ふしゅ、ハハハハハハ…………」

「もう、ゴン太はほつといで、先行きまじょー。」

「そりですね、委嘱書」（キザマロ）（ロマロ）

「はい・・・・・

「美也ひやん、スバルひやんには伝えた?」

・・・・・ プツン・・・・

WAXA

「Iのフローバルデータをといたら、なにが出てくるかわからないもの

できればIのままにしておきたいんだけど、Iのプログラムのなかが

どうなってこるか、科学者として、知りておきたいからね」

「エイリー博士、準備ができました・・・」

「ありがとうございます、大畠ちゃん。じゃあ、いよいよはじめましょう・・・」

ウイーン…………解凍率10パーセント…………

…………20…………30…………50パ

一セント…

…………70パーセント…………ビロードコットン…………

「な、なんだ！？！」（天地）

「…………やはり、いけなかつたのでは、博士」（大畠）

・・・・・ 80パーセン・・・・・ 90・・・・・

・・・・・ 完了・・・・・

「…………ふう、なんとか・・・・・」

・・・・・人間どもよ・・・・・糧になれ・・・・・

スウウウー――――――

「な、なんだ、・・・・・」（天地）

「す、吸い込まれ・・る」（大吾）

「・・・・・・・・・・」（ヨイロー）

「うわああああああ――――――

黒い影

~~~~~＼＼＼＼＼~~~~~

「ついたわよー。」

「わあ~~~~~

上下左右が光に囲まれた空間・・・・・・

そのなかからあふれんとするような人ごみ

200年以上まえ、この地におきた悲劇を語り継ぐべと

いまもモニュメントの光は変わることなく人々を照らし続ける

「人ごみがす」いから、万が一はぐれても大丈夫なようこそ

今日とまる予定のホテルの地図をおくつたわ

ちやんと帰つてくるのよ、特にゴン太！」

「…………はい……」

「じゃあ、行きましょ」

そして、5人は人ごみの中に入つていった……

「す」「いなあ……」

スバルはすっかり光にみとれていた・・・・・・

「う、うわあああ――――――」

『どうしたんだ、スバル』

「だれかに、腕を引っ張られてる・・・・・」

＼＼＼＼ WAXA＼＼＼＼

一瞬で廃墟と化したWAXA内部・・・・・

「・・・・・俺達が、また動けたところ」とは・・・・・

『炎山をま、やつの封印が解かれていますー』

「・・・・・やはりな・・・・・・・・

光のやつは・・・どにかわかるか・・・ブルース

『いえ・・・わかりません』

・・・・いや、光なら、やつを追いかけていった・・・

「・・・ライカ！！」

「・・・まずは俺達の周りの情報を集めよう・・・」

「・・・わかった・・・」

~~~~~カンベシティ・展望台~~~~~

「まさか、君だとはおもわなかつたよ・・・」

「ソラね。名前、はやく覚えてよねー。」

「う、うぬん・・・」

『……………』、こめよ・・・・（ハープ）

（ハープ）

「…………スバルくん、お願いがあるの」

「なーん？」

「Iの、南京錠に・・・私の名前を・・書いてほしいの」

「…………なんでも？」

「……………」れこのお手ての名前を書きあつて、

あそこにある木にまめると……

「…………はめると…………？」

暗くてみえないが、ミソチの顔は赤くなっている

『がんばって、ミソチー。』

「かわると……………」

スバル~~~~~

「なに、ウォーロック？」

『なにか・・・・・近づいてくる・・・』

「えつ！？」

キヤー————ツ——わあああああああつ——！

バーン・・・・ドゴーン・・・・

「ユーハルハが…………あの黒い影は…………」

『スバル、電波変換だ、はやく止めに行くぜ！』

「わかつた！！！」

電波変換、星河スバル、オン・エア！！

パシューーン・・・・・

『ミソラ、言えなかつたわね・・・・・』

「・・・・・ハープ、行くわよ」

『・・・・・スバルくんの手助けね・・・わかつたわーーー!』

「電波変換、響ニンフ、オン・エアー！」

パシューん・・・・・

大切な人

～～～～レミルミ工上空～～～～

バーン・・・ドゴーン・・・・・

「やめるんだ！－！」

スバルは叫んだ

『なんだ、キサマは・・・・・』

「ぼくはロックマン！－！破壊をやめろ！－！」

『ロックマン？・・・・・ばかな・・・・・

・・・・オレには・・・チカラがたりない・・・・

・・・・ゲットアビリティプログラム！――』

スウウウウ――――

「く、カラダが、吸い込まれる・・・・・」

• • • • •

・・・・・ショックノート！――・・・・

「うわっ！――！」

スバルは巨大な音符によって、なんとか危機を脱することができた、だが

「・・・・・きやあ――――つ！――！」

ハープ・ノートが吸い込まれていく・・・・

「・・・・・ハツ・・・・・

」

「・・・・誰かに伝えないといけないこと・・・・・

なにか・・・・大切なことを忘れてる・・・・・」

『ちやんと、自分の想いを伝えないと、

リソラは一度と振り向いてくれないかもしねいよ』

「…………リソラ…………？」

「…………リソラ…………ちやん…………」

バタツ…………

「す、スバルくん！！大丈夫？？？」

なにでせうのな前を・・・・・

「・・せん・・・・・じり・・・・・

・・・わ・・・・たし・・・・・の・・・・・

・・・おほ・・・・え・・・・て・・・・ない・・・の?」

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

」

」

・・・・覚えてるや

『どうした、スバル』

「ソラちゃんーー！」

「・・・・・・・・・・・・・・

「いま助けに……いくよ、ウォーロック！……！」

『おひー。』

バトルカード、ソード！

「ハーブ・ノートを……返せえ……！」

まだ、ハーブ・ノートは吸収されていなかつた

『…………邪魔だ！…………消えろ…………』

アースブレイカー！！！！

『あんなの落とされたら、ひとたまりもねえぞ！』

・・・・・
引け、スバル！――！』

「ニヤ、無くせり!!!」を助ける…………。

କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

もう一人の・・・

シユウウウウ・・・・

ハープ・ノートは吸収されてしまった・・・・

「つつ、つて、あれ？」

『大丈夫か？』

「口、ロックマン？」

『よくがんばった、あとは任せてくれ・・』

「は、はい・・・」

スバルは下に降りていき、上を見上げていた・・・

『お、おい、スバル、なにが起こったんだ』

「ぼくにもわかんないや・・・」

『・・・・・フォルテ！－！－！』

『・・・・・追つてきたか、光熱斗・・・なんのよつだ・・・』

『決まってるだろーお前を倒しにきたーー。』

バトルチップ！パーティソンソード、スロットイン！

『おもしろい・・・・・ダークアーマブレード！』

フォルテの腕が黒紫色のソード状に変化した

カシカンカンッ・・・・・

チカラはまよ五角のようだ・・・

『 ireならどうだー。』

バトルチップ、ソード、ワイドソード、ロングソード

そして光を帯びながら変化し・・・・・

プログラムアドバンスードリームソード…

カーン・・・バキッ！

『くつ、まだチカラが・・・足りん・・・』

『とどめだ〜〜』

ロックマンがソードで切りかかるひつとしたそのとき

『・・・・・勝負はお預けだ・・・ロックマン』

シユン・・・・

『・・・・消えた・・・・』

「…………助けていただきありがとうございました」

「いや、いいよ全然〜〜〜つ

あのセ・・・・・・聞かたいんだけど・・・・・

今つて、西暦何年?」

「22XXXX年ですか?・・・・・

「えつ、ロック、聞いたか?」

『へ、うん・・・・・・もつい〇〇〇〇年も経ったんだね』

「に・・・・ひく・・・・は・・・・200-?.

ええ～～～つ、200年もたつたのか～～～～!..」

『熱斗くん・・・・・・氣づくの遅すぎ・・・・・・』

かつての英雄達

ひかり~~~~~

タツタツタツ・・・・

「おい、フォルテはどこへ・・・」（炎山）

「・・・・逃げられた・・」

「そ、うか・・・・」

「あの、聞きたい」とがあるんですけど……」

スバルが尋ねた……

「さつきいたフォルテって、もしかして……」

「そり、やつはかつて、電腦世界を滅ぼしかけた……

・・・・・といふか、こいつは・・・だれだ・」（炎山）

「星河スバルです、さつきロックマンさんにたすけていただいた

「おれは、光熱斗。よろしく、スバル！」

「・・・・・伊集院炎山だ・・・・・」

『炎山さまのナビ、ブルースです』

「おれは、ライカ・・・」

『・・・・・サーチマン・・・・』

(うわあ～、歴史上の人物が、ぼくの目の前に・・・・)

「・・・でさ、スバル、どうしてこいつがロックマンってわかったんだ?」

「・・・歴史の時間でなったのと・・・・・

あと、ぼくがこの時代のロックマンだからです

「へへ、スバルってすげいんだなあ

じゃあ、フォルテのことも知ってるのか?」

「はい、電腦の破壊神つてなっていました」

「…………そりゃ。」

「あの、どうして、熱斗さん達がこの時代に…………?」

「よし、じゃあロックマン、教えてやつてくれ!」

『もう熱斗くん……もう三十歳でしょ、自分で話しなよ

そもそも熱斗くんこなは……』

「わかつた、いぬいぬ、自分で話すから。説教だけは・・・

・

『・・・』

「アーニ、ジヤの話か？ー・・・・・・」

かつての英雄達（後書き）

タイムアウトです

~~~~~約200年前~~~~~

電腦獸の消滅から、18年・・・・

誰もが平和になった・・・・と確信していた・・・・

しかし、かつてウラインターネットの最深部に眠っていたフォルテが

目を覚まし、オモテの世界にて攻撃を開始した・・・・

俺達3人はフォルテを止めるべく、戦つたが・・・・

・・・・まつたく歯が立なかつた・・・・

まさに世界中がフォルテの脅威にさらされていた

だが、おれは昔、セレナードというウラの王からもらっていた  
ログランム・・・

・・・・ギガフリーズをもつていた・・・・・

これを使えば、フォルテを倒せなくとも地球が救われる・・・  
しかし、仮に向年かしてフリーズがとけてしまったとき、

フォルテを止めることができんだろうか・・・・・

そこで俺は2人と協力し、俺達自身をフリーズしてしまつ」と

何年か先、フォルテのフリーズがとけても暴走を阻止する……

そのときに備え、パルストラ NSミッションによってナビと意識をひとつにし

ウラインター ネットにフォルテが入ったところで……

・・・エリア全体をフリーズさせた・・・

そのあとは科学省によつてフリーズしたエリア」と圧縮し

どこかに隠すといつ計画だった



「こんな感じなんだけど・・・わかつたかな」

「はい・・」

「・・・で、フォルテを追いかけないといけないんだけど・・・

「……………」

「それなら、WAXAにいけば・・・なにかわかるかもしだい」

「ほ、ほんとうなのか、スバル」

「はい、あそこならい科学者たちが・・・・・」

「残念ながら、そのセンは捨てたほうがいい・・・・・」

「・・・・・なぜだ・・・ライカ・・」（炎山）

「あそこの人間は・・・全てフォルテに吸収された・・・」

「あ、あやか……………!!」やんだけじやなくて

……………やれんやでも……………フォルト……………」

## アマケン

「ミンカラひやんだけじやなくて、父さんまでも……」

『スバル、気持ちはわかるが今はそんなくよくじてる場合じやねえぜ

まずはあのフォルテを倒すまつりを考えねえと、

地球が破壊されちまつ!』

「……わかったよ、ウォーロック……」

「なあ、スバル。ほかに研究施設の整つた場所はないか?」（熱

(半)

「それなら・・・・・アマケンが・・・・」

「ビリあるんだ?」

「ウホーブライナーで行けば・・・・・・・・・・

・・・案内するんだからいいださー

「よし、わかったーじゃあ行くぞ、炎山、ライカー」(熱斗)

『おい、スバル、電波変換で行つたほうがはやくねえか』

(この人たちは電波体じやなくてナビだから、ウェーブロードは  
使えないよ)

『・・・・・ そうなのか?』

「…………」ウエーブライナー・カンベシティ駅

・・・・ダ、ダメだ・・・・・

ウエーブライナーはフォルテの影響で機能が麻痺していた

「くつそー、どうすれば……！」（熱斗）

―――フルルツ、フルルツ―――

スバルのハンターV Gだ

「はい、スバルです」

「もしもし、スバルくんですね？」

「宇田海さん？」

「急いでアマケンに来てくれませんか」

「それが、ウーブライナーが通つてなくて……」

「やつどうか、では今からアマケンとスバルくんのいる所に

シートカットキーを作るのをちょっと待つてこいつをひくませんか」

「はい、でもなぜ、ぼくに電話を……」

「…………ヨイロー博士、天地さん、大畠さんがいなくな  
りました」

（・・天地さんまでも！）

「私がさつきWAXAに原因を調べに行くと、内部に

WAXAを襲つたものと見られるプログラムデータが落ちていま  
した・・・

そして、そのデータを使い、WAXAを襲つた謎の物体の位置を  
特定する

ハンターV用の機能を開発しました。

なので、それをスバルくんのハンターバーにインストールしようと

連絡を入れたわけです

「つまり、それがあれば、謎の物体を追いかけられるんですね」

「……そのとおりです……

では、ショートカットキーをつくるんで、スバルくん

まつていいくだい

・・・・・パン・・・・・

~~~~~ 20分後~~~~~

ピキーン・・・・・

「あらがとうござります、宇田海さん」

「・・・・・でスバルくん、あの方達は・・・」

「・・・・・このハネは・・・・・」（炎山）

「すいな・・・・こんなに進歩していふとは・・・」（ライカ）

力チャ力チャ力チャ・・・・

「何していいんですか、熱斗さん」（スバル）

「いま・・・・・・・P E Tをつくりてるんだ・・・

「このまま、ロックマンと合体していくも不便なことがあるだろ
うし・・」

「それなら、このハンター→Gをつかってください」（宇田海）

「え、いいんですか？」

「いいですよ、それを使って・・・」

「あ、ありがとうござりますっーーー。」

やうこいつと、熱斗たちはパルストラッシュションをといたが・・
・

「・・・・・俺達は、データ化しているんだつたな・・・」（炎山）

「スバルくん、『ペーローロード』あるへー」（熱斗）

「いえ、もう今はなこです・・・」

「しまつたな・・・」のまほじゅハントーベGを持ってないや
(熱斗)

「大丈夫ですよ、これを・・・」

もうこいつ宇田海が出したものは・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ゴクゴク・・・・・・・・・・・・・・

一回は鳴きをのむ・・・・・

「この装置は、マテリコアライズ機能を応用して作った、

どんな物質でも物体化してしまつ装置・・・・・名前はないで

すが

「じゃあ、それを使えば・・・・・」（熱汁）

（半熱汁）

「データ化してしまったあなた達でも物質化できます」（宇田海）

「……………」（炎止）

トランプ（前書き）

50話目突破して、PV15000突破、これからもよろしくお願いします！

トランスコード

シユウウウウウウ・・・・・

「よしー」（熱斗）

「・・・・・ 200年後にこんな技術が・・・・・」（炎山）

「・・・・・ 感謝する・・・」（ライカ）

3人は無事、実体化成功した

「宇田海さん、質問が・・・」（スバル）

「なんですか・・・」

「フォルテに吸収された人たちは、どうなったんですか?」

「それは・・・わかりません・・・」

『スバル、お前は鈍感だな!』（ウォーロック）

「えりじて?」（スバル）

『俺は感じるぜ、ハープ・ノートの電波反応をよ

あの女のブラザーも消えてねえだろ?』

「・・・・・ホントだ・・・・」

『たぶんやつは、一見吸収したやつらを力に変えてこるみたいにみえるが

実際はただ、体にためてるだけのホラ吹き野郎だ』

「・・・いや、違うな・・」（炎ヨ）

『なんだ、オレをまに・・・・・』

「ふん、血の氣の多いやつだ

・・・いいか、やつは力に変えられないのではなくて、

・・・ 变えていないんだ

・・弱いやつはわざわざ力にしても意味がない、そういうことだ・

まあ、田覚めたばかりで吸収したものを迎える力がないだけかも
しれんがな・・

『・・・・・ケツ・・・』

(・・・ウォーロックが黙るなんて・・・・・・・・・・

やつぱりこの人たちは・・・・・すごいー)

「やつが狙うのは、力に変える価値のある、巨大なエネルギーだ

・・・・・スバル、ハンターV Gを見てみる・・」（炎山）

カチヤツ・・・・

スバルはハンターV Gを見た

「え・・・・・反応が・・・・消えた」

「いや、消えることはありませんよ

たぶん、この地球の外、宇宙とかに・・・・」（宇田海）

『・・・スバル、サテライトだ！！！

そこから大きな反応を感じる！！！』

「ナトリウム…? もうあらねたら…・・・・危ない…」

「…・・・・ナトリウム何だ?」(炎山)

「もう――――――今はそんなの気にしている場合じゃないぜ――」

「…………だが…………」(炎山)

「炎山さん、向かひ途中におしえますんで、行きましょ」

（スバル）

「しかし、どうせナビとシンクロするんだ」（ライカ）

「ああ、もうです、『トランスマード』、『ヒューズ』……

それから、スバルくんもサテライトシステムの整備が終わつた
ので

トランスクードを叫べば電波変換ができます。」（宇田海）

「ありがとう、宇田海さん」（スバル）

「・・・電波変換とは何だ?」(炎山)

「...」
X
、
」

『熱オくん・・・・・・・・・・・・・・』(ロジ)

クマン

「とにかく、行きましょう!」（スバル）

よ～し

トランスコード

ロックマンエグゼ！～！

ブルース！～！

サーチマン！～！

トランスコード003

シュー・ティイングスター・ロックマン

！～！

「行へる。」（翻訳）

おおつーーー。

シユジ———

「頼みましたよ・・・・・・」（伊田海）

「スバルのトランസ്കｰଡ、かっこいいなー」（熱斗）

「…………まあ…………まあ…………」（スバル）

「やんなりとやつ、かわ…………」（炎エ）

「いんだよ……」 × ……」（蘇サ）

『熱^クくん、畠葉が…………なってない…………』（ロックマン）

(「さんどわでや撲オヤん達はコハシクスしてゐる・・・・

・・・・・・・・ほくも見縞わなこと・・・・・・・・

『別に、見縞わなくていいんだぜ』（ウオーロック）

「えつー?」（スバル）

サテライト・ペガサス

「宇宙か…………キレーだな…………」（熱斗）

「ウオーロック、どのサテライトに反応がある?」（スバル）

『…………ペガサスだ…………』

「…………しかし電波体とは便利だな…………」（炎山）

「熱斗さん、ゴッちですー!」（スバル）

「よし、行けー」（熱斗）

・・・・・そのじる・サテライト・ペガサス・・・・・

『・・・・・きせまから・・・・・チカラを感じる・・・・』（
フォルテ）

『何のようだ、ここは立ち入り禁止のはずだが』（ペガサス）

『・・・・・キサマのチカラを・・・・・いただく！…』

・・・・・ヘルズローリング！！！

黒い輪のようなものが2つ、勢いよくペガサスに向かっていく

『だれか知らんが、サテライトを壊そうといつのなら・・・排除する』

・・・・・ペガサスフリーズ・・・

すると、フォルテの下から魔法陣が現れ・・・

『・・・・・フン・・・・』

大きい氷柱が襲おうとしたが、フォルテはよけてしまつ

しかし黒い輪は破壊できた

『・・・・・システムが壊されではかなわん・・・』（ペガサス）

すると、ペガサスは宇宙に出た・・・

『・・・・・逃がさん』

そう言つてフォルテも宇宙に出た

ペガサス~~~~~

『・・・・星河スバル・・・・』(ペガサス)

『・・・・油断したな・・』(フォルテ)

・・・シュン

フォルテはスバル達の前に現れ

・・・・ダークネスオーバーロードーーー！

「しまった、油断した」（熱斗）

「・・・・・くつ、イニョआでか・・・・」（炎山）

『喰らえーーー』（フォルテ）

・・・・・・・・・・・・・・・・

「…………え？」（熱斗）

「フ、フォルテが…………凍つてゐる」（スバル）

『大丈夫か、星河スバル……』（ペガサス）

「そうか、このコオリは、きみが助けてくれたんだね、

ありがとう…」（スバル）

『・・・スバル、まだ喜ぶのは早そうだ…』（ウォーロック）

「・・・どうして、ウォーロック？」（スバル）

「……………」（炎山）

「……………ああ、やつまの程度で終わるやつじやない・・・」（リカ）

「……………や、やつじや・・・やつを倒したハズじや・・・」（スバル）

「……………ゲットアビリティプログラム・・・

フォルテは完全に消さない限り、倒せない……」（熱斗）

「……えつ……どうじつ」とですか……」（スバル）

「……生きていたら話してやる……」（炎山）

……バーン……

「オリの割れた音だ

「構えろ、くるわー！」（ライカ）

パシュー――――ン、ダークネスオーバーロード！――

『グハアアア――――』

フォルテはペガサスの後ろに回りこみ一瞬で技を打ち込んだ

「ペ、ペガサス！……は、はやい！」（ス
バル）

『星河スバル……これを……』（ペガサス）

パ——ン

「・・・・・これは、スター・フォースカード・・・・・」（スバル）

『・・・・ゲットアビリティプログラム！・・・』

スウウウウ――――――

・・・・・ペガサスは吸収されてしまった・・・・・

『・・・・・スバル・・・・』（ウォーロック）

「うん・・・・・・」これからが本当の戦いだ、行こう

スターフォースカード・セット・イン！――！

パーン・・・・スバルをまばゆい光が包む・・・・

ロックマン・アイスペガサス！－！－！

サテライト・ペガサス（後書き）

強者

「行くぞ、フォルテ！！！」（スバル）

『…………おもしろい…………』（フォルテ）

・・・・エアバースト！

黄色にかがやくエネルギー弾がフォルテの手から発射される

「くらえーアイススラッシュ！」（スバル）

氷の玉が勢いよく繰り出される

・・・バ――ン・・・

『・・・・・互角・・・・・なぜだ・・・・』（フォルテ）

『互角じゃねえぜ、 いつたれ、 スバル！――』（ウォーロック）

うおおおおおつ・・・・マジシャンフリーーズ！――

フォルテの下からあらわれた氷柱がフォルテにヒット・・・・

「よしーー」（スバル）

「スバル！後ろだ！ーーー」（熱斗）

『・・・所詮オマエは・・・弱者・・・・・・・』

・・・・・ダークアーマープレーラー』(「ホルテ）

・・・・・キンッ・・

「え、炎山さん！」

「おれがもたない、早く体勢を立て直せ・・・・・・」

『・・・・・まぢは・・・・・オマヒカヒトコートしてやるや・・・・・

ギガキヤノン！！！

バン！！！・・・フォルテに命中した

「くつ、プログラムアドバンスでもこの程度か・・・」（ライカ）

・・・・・・・・・人間のブンザイで・・・・・・・・・

「わわおらまどぬドテコートシトやる……」（フォルテ）

ブ――――ン・・・・・

・・・・・くらえ！アースブレ・・・・・

・・レオブレイザ――！――！

すさまじいまでの火炎がどこからか現れた・・・

『・・・ダレだ・・・キサマリ・・・』（フォルテ）

『わが名は、レオ・キングダム』

『わが名は、ドラゴン・スカイ』

『……………しかたない……………』は…………ひくか…………

(フルテ)

バツ

「くっ、逃げられた・・・・」（スバル）

『ありがとう、人間達よ・・・』（レオ）

「いえ、それが、ペガサス・マジックが……」（スバル）

『わかっている……フォルテとかいつたな

いまの、あなた方には、やつは倒せやー』（ザリガニ）

「…………じゃあ、どうやつて……」（スバル）

『…………強い絆のチカラ…………

「……………」（炎山）
「……………」（レオ）
「……………」（ラザーバンド）

『そうだ・・・・・

いまの我々には、これしかわからない・・・・・

だが、絆を一つにして戦えばフォルテは倒せるかもしれない』
(レオ)

「絆を・・・・・一ひとつに・・・・・」(スバル)

『すまないが、ペガサス・マジックがいなくなつたことで

我々の仕事が増えてしまつた……

では、失礼する……』(ドリゴン)

パシユーノン……

(絆を一つにして……チカラを……)

・・・伊田海さんで聞こひよつ・・・

「まあ、気持ちはわかるけどさあ、寝ないと体力もたないぜ」「ぜい」（熱斗）

「フォルテはいなくなつたが、またドコから現れるか・・・」（炎山）

『・・・もつ夜の1時だもんね』（ロックマン）

「ふああああ・・・眠くなつちまつた」（熱斗）

「…………たしかに熱斗の言うことは一理ある…………

「…………今日はどこかで休んで、体を回復させよう」（リカ）

「…………」（炎山）

「スバル！なんか寝るのにいいトコはないか？」（熱斗）

「あ、じゃあぼくの家に来てください」

『スバル、もう夜の1時だぜ、おフクロになにいわれるか……』



（しかたないよ、ウォーロック、ちゃんと事情を説明すれば……）

『……おれは知らねえからな！』

「じゃあ、戻りましょー！」（スバル）

スバルたちは、地球へと帰つていった・・・

家族の絆

~~~~~星河家・玄関前~~~~~

「あれ、鍵がかかってる……」（スバル）

『おフクロに締め出しひらつたんじやあねえか？』

・・・まあ、オレさまが直々に中から開けてやるよ・・・』（

ウォーロック）

「……お願いします」（スバル）

・・・ガチャツ

「ありがとう、ウォーロックー。」

『まあな』

「じゃあ、おひくつけて来てください……つてあれ? いない」

『……もう部屋に行ってるみたいだぜ……電波変換で……』

「……………部屋にいる」

「……………ガチャツ

「はあ～、この部屋久しぶりに来たあ」（スバル）

「この一日間、旅行に行っていたので久々に感じたのだろう

『バレないでよかつたな！』

だが、炎山はあることに気づく・・・

「・・・スバル・・・本当にこの家に誰かいるのか？」

「・・・えつ？」（スバル）

「「」の家に、俺達以外の気配は感じられん・・・・」（炎山）

「・・・・・まさか！？」（スバル）

スバルは、母のあかねが寝ていそうな場所を見て回つたが・・・

「ホントだ・・・・母さんがない・・・・」

『スバル、オフクロに電話したりどうだ』

- - - - - シー シー シー - - -

「つながらないや・・・」

『メールは

「・・・・・『届かない』

『・・・・・いつたこドコでこせがる・・・』

~~~~~そのじゅ・フォルテ・体のなか~~~~~

「・・・私達、死んじやつたのかな・・・」

『**考えすぎよ、ミソチー元氣出して！**

とにかく、ここに他のひとがいないか探しましょ』

「・・・うん」

あたりは一面が暗闇に覆われ、歩いても歩いても変わらない風景

はたしてここに人がいるのか、ミソラは疑問に思っていた

「はあ～、人なんてここにいるのかな」

『大丈夫よ、ちゃんと気配は感じてるから・・』

…………//ツリサセや～ん。」うるさいが、

「…………！」の声は……。

//ツリサセとにかく声のする方向へあるべきでした

その先には…………

「やあ、FM星以来だね

「だ、大吾さん！」

「WAXAの職員はみな吸い込まれたんだよ

・・・・電腦の破壊神、フォルテにね！」

「・・・・フォ、フォルテ！！！」

200年前の伝説のナビが、なんで・・・・

「それは、ぼくらの責任だ

「ダマタウン展望台沖の海底に、謎のハ『型』テータを見つけた
んだ

「その正体を暴こうと、フリーズをいた瞬間に・・・フォルテが・

・

「そうだったんですか・・・

「・・・とにかくこの脱出しないと・・・

スバルが一人取り残されてしまう・・・

「・・・スバルくんが一人つて・・・」

「ああ、オレと一緒にWAXAに来ていたあかねも、吸収されてしまつた

いまはそこにあるが……、

もし、ここのまま脱出できなければ、スバルを一人ぼっちにさせてしまう

そんなことは絶対にさせない……、

スバルがいることは、オレとあかねの……生きる理由なん
だ・・・

だから・・・・・・くつ

暗くてよく見えないが、大吾の目には光るものがあった・・・

(・・・わたしも・・・・・スバルくんを一人ぼっちなんて・・・

絶対に・・・・・させたくない！！）

「大吾さん、私も手伝います！！」

「…………ありがとう、じゃあハープノートの音波を使って
「」の中にまだ取り残されている人がいないか、調べてくれ
！」

「はい、わかりました……いくよ、ハープ！」

「あと、サテライトの整備が終わつた関係で

「ranscodeだけでも電波変換できるからー。」

「ハイ

トランスクーデ・ハープ・ノート！――

「いくわよ、ハープ！」

『ええ、音波の調節は任せでー』

ショックノート！！！

~~~~~星河宅・朝~~~~~

「よし」（スバル）

「フォルテはいま、暴れてないからな

スバル、昨日ライオンが言つてたこと、ちやんと聞こへじよ

（熱斗）

『熱斗くん、ライオンじゃないよ・・・』（ロックマン）

「じゃあ、行ってきまーす」（スバル）

ガチャン・・・

「・・・光・・・おかしくないか・・・・」（炎山）

「えつ、なんでだ」

「なぜ、やつの居場所があのプログラムに[いら]ないか・・・・

「サテライトにも反応がないのに・・・」（炎山）

「・・・フォルテは普段オーラをまとっている

それがやつのデータ反応をジャミングしているのでは・・・」

(ライカ)

「・・・でも、あのプログラム以外にフォルテを探す方法はないぜ」(熱斗)

「・・・なら、やつが狙ひそつた場所に先回りするまでだ・・・」

(炎山)

「それはどうだ?」(ライカ)

「おやう、昨日と回じサトライだ・・・」(炎斗)

「よし、じゃあ行くかーーー。」(熱斗)

アリスパーク---

~~~~~ 30分後・アマケン~~~~~

「宇田海さん！」

「スバルくん・・・なにがありましたか」

「また質問がありまして・・・

ブランザーバンドを通じて、スターフォース以上のチカラを

出でるとは可能なんですか？」

「……………可能です……少しハナシは長くなりますが……

・・・天地さんをはじめとする我々アマケン職員は

大吾さんのいな間、ブラザーバンド機能の強化に努めていました

そして、3ヶ月前、ついに完成したんです・・・

絆の強さをチカラに変換する・・・・・キズナ・フォース・シス

「システムを」

「キズナ・フォース・システム?」

「はい、その新機能はブラザーを結んだ人とのキズナの強さに応じて

チカラを増幅させることができます……

ちらにそのブラザーが特別なウィザード

-----たとえばFM星人であつたり、一般的のウェイザードとは違
う特性を

持つてゐるならば、そのチカラを借りて使ひことができま
す。

・・・それを、キズナクロス・・・

『それを使ひこなはぢつすりやあいいんだ

「・・・」のKFCプログラムを使えば・・・

しかし、まだこのプログラムは不完全で・・・

キズナ・フォース・システムを発動させてから終了させるまでの間に

・ ブラザーのなかに一人でもキズナを信じないものが現れれば・・

システムを使っている本人はフリーズ状態に陥り

・・・一度と生きて帰つてこれなくなります

・・・・・

「大丈夫ですよ、宇田海さん！」

「…………えつ…………」

「ぼくのブロガーにキズナを信じない人はいません

大丈夫です、必ず…………生きて帰ってきますから」

「スバルくん…………わかりました

では、このKFCプログラムを…………

宇田海はウォーロックにインストールし、

「あと、キズナクロスを発動させるには、このカードをつかって
ください」

「これは……」

「クロスカードです、これを使えばキズナクロスを発動できます

しかし、ダレとクロスできるかはわかりません……

「はい、ありがとうございます」

「頼みましたよ、スバルくん・・・」

「任せてくれ下さい

フォルテを・・・・・・・・絶対に倒します!」

『たまにはいい』と言ひじゃねえか、スバル』

プルルツ、プルルツ・・・・・

『スバル！オート電話だ！』

ガチャツ・・・

「スバル！サテライト・レオにフォルテが現れた」

「わかりました、熱斗さん、すぐ向かいります！……」

「いくよ、ウォーロック！」

『任せやー……』

トランスクードー・シュー・ティイングスター・ロックマン……！

決戦！フォルテ vs レオ・キングダム 前編

～～～熱斗たちが家を出て5分後～～～

「…………電波だと速いな」（ライカ）

熱斗たちはもう宇宙空間の中にいた……

「いま、宇宙にはまだ襲われていない2つのサテライトがある

そこでだ、これからは一手に分かれて行動する……

光、ライカはサテライト・レオ、オレはサテライト・ドラゴンに行く

フォルテが現れたら、ハンターVのHELPシグナルを使って

互いに知らせるんだ……いいか」（炎山）

「ああっ、わかったぜ！」（熱斗）

- - - パション - - -

3人はそれぞれの持ち場へ移動した・・・

~~~~~サテライト・ドラゴン~~~~~

「ブルース、何か感じるか

『いえ、今はなにも・・・』

「そうか・・・では待つとするか・・・」

・・・・おまえがフォルテか・・・

# パシユン・

炎山の前に現れたのは・・・

「おれは、アシッド・エース、おまえを倒しに来た！」

・・・ロックオンソード！

炎山の体のまえにカーソルが現れ、アシッド・エースが迫つてくる

「くつ・・・・」

炎山はギリギリの所でかわしたが、アシッド・エースの攻撃は終わらない

・・・ウイングブレード！！！

アシッドエースがハネを広げて突進してくる

（・・・仕方ない・・・・）（炎山）

アシッド・エースが炎山の間合いに入ってきたときだつた

バトルチップ！ イアイフォーム！！

炎山の剣がアシッド・エースを斬る・・・

「くつ、強い・・・・・（曉）

ダメージが大きかったのか、アシッド・エースの電波変換は解けてしまった

「言っておくが、おれはフォルテではない・・・・・（炎山）

『シドウ・・・・・ビハヤヒ違っていたらしご・・・・・』（アシッド）

「・・・・・わるかつたな・・」（暁）

「お前は・・・だれだ」（炎山）

「元サテラポリス遊撃隊隊長、暁シドウ・・・・」（暁）

「サテラポリス！？」（炎山）

「ああ、おれはWAXA襲撃事件の犯人、フォルテを捜していた

サテライトに侵入者が現れたからきてみたが・・・きみは・・・」

「・・・伊集院炎山だ、おれもフォルテを追っている・・・」

「伊集院炎山！？なぜ、200年前の英雄が・・・」

「ハナシはあとにしより……『アヤシマの出来事だ・・・

『炎山さま、サテライト・レオからHELENAシグナルが・・』（  
ブルース）

「・・・・・・よし・・・」（炎山）

パシコン・・・・・・

『・・・・シドウ、ビームる・・・』(アシッド)

「もちろん、行くぞー。」(暁)

「…………サテライト・ペガサス…………ちょっとだけ前…………」

「ロックマン、フォルテの気配は?」（熱斗）

『まだ感じられないよ。それより、炎山くんはだいじょうぶかな?  
』

「ははっ、まあ心配することないぞ。ビーセ大丈夫だよ」

「…………光…………くるぞ…………」（ライカ）

・・・またあらわれたか・・・・おろかな人間どもよ・・・・

「フォルテー」（熱斗）

『・・・・・いまのキサマに用はない・・・・・』（フォルテ）

アーヴィングとフォルテは一瞬でレオ・キングダムの前に現れ・・・・

・・・キサマのチカラ・・・・・・・・・

スバル！ サテライト・レオにフォルテが現れた！ ・ ・ プツン・・





決戦！フォルテ vs レオ・キングダム 前編（後書き）

効果音とバトルシーンが二ガテです・・・

決戦！フォルテ vs レオ・キングダム 後編（前書き）

タイトルと内容は必ずしも合っているとは限りません．．．矛盾しました、すみません

## 決戦！フォルテ vs レオ・キングダム 後編

~~~~~サテライト・レオ~~~~~

『倒せるものなら倒してみよ』（レオ）

すると、レオの足下には巨大な魔法陣が現れ、氷柱がレオ・キンダムを氷づけにさせてしまった・・・

『トドメだ・・・』（フォルテ）

「やせるかー」（熱斗）

「光・・・・ソウルゴニゾンだ！」（ライカ）

「おおつー」（熱斗）

ソウルゴニゾン！ロックマン・サーチソウル！

ロックマンの体は深緑を基調とした色になり、左手のロックバス
ターはサー・チガンに変わっていた

スコープガン！！！

カーソルがフォルテにあつた瞬間に、弾が発射された、しかし

『目障りだ・・・・・消えろ！！』（フォルテ）

命中したが、フォルテにはまったく効かず・・・

アースブレイカーはロックマンに直撃した

「ラ、ライカ！」

「・・・ひ・・・か・・・り・・」（ライカ）

「・・・・・あれ、効いてない・・・・・」（熱斗）

「あとは・・・・・まかせたぞ・・・・・」

「おい、ライカ！ライカ――――――！」

・・・ライカは熱斗を攻撃から守るため、ソウルコニゾンを解除
し自らを犠牲にした

そして、ライカはそのまま宇宙のチリと化し消えていった・・・

・・・・シユツ

「・・・・一足遅かったか・・・」(炎山)

「ライカが・・・やられた・・・」(熱斗)

「・・・それだけじゃない、あれを見てみろ」

炎山の撃をセした先には、レオ・キングダムをフォルテが吸收している光景があった

そして完全に、レオはフォルテのチカラの一部と化した・・・

「やつのチカラが・・・・ビリカル・・・・」（炎山）

「・・・やあらん戦つた、やられたライカのためにも、絶対勝つ

「いやあ……」

「フツ、光らしきな……

行くぞ！ソウルゴーヴン

ロックマン・ブルースソウル！――！

「こんどは全身赤色を基調とした姿に変化した、左手にはソードが
装備されている

「やつには飛び道具は効かないらしい……」（炎山）

「それなら直に行くまでだ！－！」（熱斗）

バトルチップ！－ファイターソード！－

「行くぞ、フォルテ！－！」

『・・・・・キサマラの相手などムダだ・・・』（フォルテ）

ショーンッ・・・・・

フォルテはサテライト・レオの方向へ消えていった・・・

「追いかけるぞー」（熱斗）

ルナ)

星河くわは公園に呼び寄せておこへ、こひへるのよつー。」

「旅行は中止になつたし、こきなつミンラちゃんは一なくなるし・
・

～～～～～ルノ・ルダマタウン・公園～～～

「まあまあ悉く、落ち着いてください。」（ロザリオ）

「エリスバルくんは『元気』呼び寄せたのかな」（マナブ）

「わあな。しかし、世界はこま何が起りつつあるんだ」（マモロ
ウ）

・・・シロッ

「ロックマンがぁ……じやなへて星河へさー！

こつたに向ひなのーー説明してーー！」（ルナ）

決戦！フォルテ vs レオ・キングダム 後編（後書き）

フォルテのゲットアビリティプログラムの機能は2つあります

1つは対戦した相手の攻撃などをくらうことで相手のチカラを手に入れる

2つめは相手を自分に取り込み体内でデータを同化させることで、相手のチカラを手に入れる（エグゼ3のプロト戦前にフォルテが縁の球状プログラムを取り入れた方法）

一応、書いておきました

たぶんこんな感じだったと思いますが・・・

あと、ここ数話がフォルテ編がだらだらしていますが、まだ続きますので我慢して読んでください、お願いします

『言ひしる……！』

「みんなに伝えておかないとけなこじがあつて……」

「なんなんだ、スバル？」（ゴン太）

「と、いうか、カンベシティで何が起つっていたの

「知つてゐるんでしょ、説明してー。」（ルナ）

「・・・うん、わかつたよ

じつは・・・・・・

スバルは復活したフォルテのこと、吸収された大吾たちのこと

光熱、斗達、そしてキズナ・フォースシステムのことを話した

「なるほど、ブランザーの絆を信じる・・・か」（マモロウ）

「わたしたち、星河くんにあまり信用されてなかつたみたいね」
(ルナ)

「えっ・・・」(スバル)

「わたしたちは星河くんにそんなこと言われなくて

あなたの絆を信じないなんてこと、絶対こしなこわよ」（ル
ナ）

「そのとおりですよ、スバルくん。まくらばブリザーなんですか
」（キザマロ）

「やみをフリーズなんか、絶対させなこぜ」（マモロウ）

「マグネットのチカラ、使ってくれないか」（マナブ）

「フォルテなんか、さっそくせつけてくれよなー。」（ゴン太）

「・・・・ありがとう、みんな」（スバル）

『だから、あのまま宇宙に行つとねばよかつたんだよ』（ウォーロック）

「でもさうなんじゃつてもおかないと……」

「あれ、ツカサくんは…………見当たらぬけど…………」
(スバル)

「おまえ、あいつともアリザー結んだのか?」(ゴン太)

「う、うん……」(スバル)

「まあ、ツカサくんには、私直々に連絡しておくから行つてきな
さい」（ルナ）

「ありがとうございます、委員長」（スバル）

「フォルテを倒したら、また旅行行きましょう」（キザマロ）

「うん・・・・じゃあ行つてきます」（スバル）

ショーン

~~~~サトライト・ドリーン~~~~

ヒヤツカリョウウランー

「オオオー—————

『・・・ムダだ・・・・』（フォルテ）

『・・・キサマを取り入れ・・・・人間に復讐を・・・・』（

ドラゴン・スカイの吐いた息吹もフォルテの前では無意味・・・

フォルテ)

ブー――ン・・・・・・・・アースプレイカー――!

バゴー――ン・・・・・

ドラゴン・スカイはサテライト」と吹き飛ばされ、

そしてドラゴンはダメージを喰らい、瀕死の状態に陥った

『ゲットアビリティプログラム!』

フォルテの右手のひらが、ドラゴン・スカイを飲み込んでいく・

「フォルテ！！！」（熱斗）

しかし、熱斗が着いたときにはすでにゾーラン・スカイはフォルテの中に・・・

『・・・なんのよつだ・・・』（フォルテ）

「お前を倒しきれた！――」（熱斗）

『倒しききた・・・・・・・おもしおこ・・・・・・・・

・・・・・試してやる・・・このチカラを・・・・・』(フォル

(テ)

・・・・バトルチップ、ワイドソード!—

・・・・・ダークアームブレード・・・・

‘ウチホホホホホホホホ---

#ンシ---

おじりーーー！（後書き）

朝の4時半、操作を間違えて未完成のまま出してしまいました。すみません。

スバル合流！

・・・・カンツ・・・・・キンツ・・・・

フォルテと熱斗（炎山とソウルユニゾン・ブルースソウル）は  
剣を交えていた

『・・・・・フン・・・・・ちょこまかと・・・・』（フォルテ）

・・・パリン

「やばいな・・・完璧に押されてるぞ・・・」（炎山）

熱斗のワイドソーナーは折られてしまった

「じゃあ、これなりだー。」（熱斗）

バトルチップ ソード ワイドソード ロングソード スロット・  
イン！

プログラムアドバンス ディーラムソードーーー

熱斗の左腕が巨大なソードの変わっていく・・・

「おりやあ～～～～」（熱斗）

スツ・・・・・

「フォルテが消えた！？」（熱斗）

「…………うしるだー！」（炎山）

『…………遅い…………』（フォルテ）

グサツ・・・

フォルテのソードが熱斗の胸に突き刺さり、貫通した・・・

「遅いのはそつちだ！－！」（熱斗）

カワリミー！－！－！

手裏剣がフォルテに向かっていく・・・・が避けられる

『・・・・』(フォルテ)

「うわ〜、効いてね〜」(熱斗)

ショーン・・・・・

「すみません、遅れました！」（スバル）

「いいぜ、で、どうだった？」（熱斗）

「レオ・キングダムの囲みたとおり……でした」

「よし、じゃあ戦つかー！」

「や二ー。」

バトルカード ヘビー キャノン！

バトルチップ キャノン×3 プログラムアドバンス ギガキャノン！

『・・・ううとうじい・・・』（フォルテ）

ブーーン・・・エクスプロージョン

無数の光が、熱斗たちの攻撃を突き進んでいく・・

くつ・・・・バリア！

「攻撃が・・・・・効かない・・・・」（スバル）

「もう、こりこり攻撃に飽きたみたいだな」（炎山）

「よしっ、ソウルユニゾン解除ー！」（熱斗）

ブーーーン・・・

「わかつた」

『スバル！クロスカード使うぞ』（ウォーロック）

「ロック、秘密兵器の出番だー。」（熱斗）

『へいへー』（ロックマン）

「だから、前に渡したやつー。」（熱斗）

『……でも、あれを使つたら……』（ロックマン）

クロスカード！プレテーション！－！－！

「 フォルテ・体の中」

・・・パルス・ソング！！

ミソラは音波をつかってひたすら暗闇の中、避難できていない人を探していた

『もうこれだけ探したらいいんじゃない?』(ハープ)

「ダメよ、ハープ。まだ、いのかもしれないんだよー。」(ミンク)

『・・・・・ハイ・・・』(ハープ)

•  
•  
•  
•  
•  
•

•  
•  
•  
•  
•  
•

『ハーブ』（ハーブ）

「わあっ！…ベックンしたあ～。今度はなに？」

『ハンター→Gから出でる・・・』の光つていてる糸はなに?』

「ほんとだ・・・・・なんだろ・・・」

ミンクのハンター→Gからは、確かに糸状の光が伸びていた

まるで、だれかとつながっているよう』・・・・・

一筋の光・・・（前書き）

投稿の間があいて、すみませんでした

# 一筋の光

公園

ミソラと同様、ルナ達のハンターVGからも光が出ていた・・・

「ついに始まつたわね」（ルナ）

「・・・スバル君、頼んだよ」（マモロウ）

~~~~~宇宙空間~~~~~

「なんだろ、この感覚は・・・」（スバル）

『ああ、見た目は変わらねえが・・・力が無限に沸いてきやが
る』（ウォーロック）

プシュウウウ――――・・・

「よかつた～」（熱斗）

『よかつたじやないよ、熱斗くん！』

サイトバッヂを使つたら、熱斗くんの体に……』（ロジクマン）

「まあまあ、もつ俺たち死んでるも同然なんだしね……」

それに、フォルテを倒すには「わくわく」覚悟しなことない。（

熱斗)

・・・・・

「行くぞー！スバル！」（熱斗）

「はい！」（スバル）

バトルカード ブレイクサーべル！

バトルチップ ネオバリアブルソード！

『・・・・・フン・・・・・少しばらようだな・・・』（フォル
テ）

・・・・・ダークアームブレード・・・

・・・・・キンッ・・・・

カンッ・・・カンッ・・・・

「二人がかりでも、これが限界か・・・」（熱斗）

『スバル！こつなりや、あれ、使つぞー。』（ウォーロック）

「わかつた！」（スバル）

・・・「うおおおおおおおおおおおおつ！――！」

ペキ――――ン・・・・・・・・

「これは・・・・」（スバル）

『音波のチカラ・・・・ハープか!』（ウォーロック）

「ハープ・ノート!?」（スバル）

スバルの体はピンク色に包まれ、手にはギターを持っている・

～～～ フォルテの体の中～～～

「……………ひこた～～～！」（リハ）

リヒトはなんとか、暗闇の中から避難所に戻ってきた・・・

「//アリヤセ、お疲れ様」（あかね）

「お疲れ様でー無事だったんですね、よかったですー。」（//アリヤ）

//アリヤはあかねの姿を見て、内心じていた・・・そのとれーー。
ーー。

ピ――ン――――――

「え、これ、なに、何の音?」 (リビング) (R.2)

『ハンター>Gよーさつきの光が反射しているわ!』 (ハープ)

「えい、うひ、うひと、うわああああつーーー。」 (リビング)

「…………あかねの呼び声もむなしく、//ソラはゼンカへ二つ

(あかね)

てしまつた

～～～宇宙空間～～～

『グツ・・・・・グワツ・・・・・』（フォルテ）

「！？様子がおかしい！」（熱斗）

(フォルテ)

フォルテの中から一筋の光が飛び出てきた・・・

「あ、あおは・・・・・・

・・・・・・・・・・・・
ハープ・ノート・・・・・
いや、//ハーフちゃん
！」（スバル）

現れたのは、間違いなく電波変換中の「ソラ」であった。・・・・・

■ハーフエプロケーブ

「……………」（スバル）

「……………えつー？」

「記憶が戻ったんだよー。」

「……………」

「……………」

・・・・うわあああ～～ん

「えつ？？？？」（スバル）

『ふふふ、オントの口を泣かしちゃダメよ』（ハープ）

「へへ？？」

『やうね～、やつぱりスバルくんには難しいわね～』（ハーブ）

「…………？」

『…………もつもんもん、感動の再会シーンは終わるのよひみの
・ まだいみの（ウォーロック）

「スバル！－」（熱斗）

「はーー！」

「これから、オレは最後のチカラをフォルテにぶつけるー。」

「・・・ビックリとですか？」

「炎山とソウルゴーデンして、やつをオレの体内に吸収する

そして、あるプログラムを使いつやつを跡形もなく消し去るー。」

すると、ミソラが・・・

「消しちぎつてしまつたら・・・中の人達は・・・」

「大丈夫。このプログラムはフォルテにしか反応しない」

「・・・本当ですか」（スバル）

「ああ、本当だ。

だから、オレがフォルテに接近するときの援護を頼むー。」

「…………はいー。」

『くつ・・・・』（フォルテ）

フォルテはまだ苦しみの中にいた・・・

「いまだ、光！」（炎山）

「ああ・・・・・・ソウルゴニゾンー！ー！」

再び、ロックマンはブルースソウルと化した

「行くぜーーー！」

#か - ハのプログラム（後書き）

「」のつづきは続けて書きます

200年前·科学省

• • • • • • • • • • • •

「でねたーーー！」

「光・・・それでフォルテを倒せるんだな」（炎山）

「ああ。でもこのFプログラムは、1体のナビでは負荷が大きすぎ
きて……」

「なら、俺とライカを混ぜろ」

「……はじめっから、そのつもりだつたけどなー。」

「フン、そうか……」

「いますぐ使えるのか？」（ライカ）

「いや、今のインターネット上で使える、フォルテビリカ

世界中のインターネット、コンピュータを消してしまつ……

そんなことがもし起これば、フォルテの推定被害以上のダメージだからな

・・・せめて、宇宙みたいな広い場所で使えれば・・・・・

「・・・いまの技術では宇宙までネットワークを広げられないか
らな・」（ライカ）

「光・・・以前おまえが『』というナビからもらった、

ギガフリーズは使えないか・・・

俺たちのナビにまずEプログラムを分けてインストールする。

そして、フォルテの前で俺たちごとフリーズさせる。

それならフォルテの暴走は抑えられるし、万が一フリーズが解けても

やつにEプログラムを使って消し去る・・・」（炎山）

「それだ、炎山！！」

「・・・将来、今よりかはネットワーク技術が発達していそうだ

かりな

「ふー、じゃあ今のは話を実行しちゃー。」

}}

~~~~~

(ライカがいなくなつてプログラムは不完全だが、倒せるのか)  
(炎山)

(ああ、やってみないとわからないぜ！

「れしか方法がないんだ。行くしかないぞー。」（熱斗）

(せつてみないとわからない・・・・か)

(よしあ～～～、待つてうフォルテ！！！）

あああああああ

## 復活と死（前書き）

これからはワードで作ってから「貼り付け」機能を使って書いていくので、だいぶ文章が長くなりました。読みづらかったらごめんなさい。

## 復活と死

『…………ううとうこう…………』

・・・アースプレイ・・・

バトルカード グラビティステージ！

『・・・クツ』

フォルテの足元には黒い渦、そして動きを止めてしまつ

「ありがとよ、スバル！」

おりやあ～～～

ド――――――――――――――

フォルテと熱斗・炎山は衝突し、一時的にフォルテを吸收

そして・・・・・

「Eプログラム、起動！」

ブー――――ン

パシュ――――ン・・・・・パツ！・・・

「・・・・・父さん・・」（スバル）

「スバル・・・よくやつた」（大吾）

「ヨイリー博士やみんなは・・・」

「フォルテから出られた衝撃に乗つて、アマケンに向かつてゐ

でも、いつたいなぜ出られたのか・・」

『・・・あの光熱斗とかいうやつのおかげだ』（ウォーロック）

「光熱斗……200年前の科学者か！？」

「うん、フォルテを封印するために自分」とフローズして……」

「……これは大変なことをしてしまった……」

「……えつ！？」

「スバル……いまから俺はアマケンに向かう……

……たぶん、光博士がフォルテの封印に使った

プログラムの残骸があるはずだ。」

「……」

「それを修復し、もう一度やつに使つ

「でも、ビツカツで……」

「それは……まだ考え中だ……」

それも含め、今は時間が欲しい・・・

アマケンで作業をしている間、フォルテを止められるか?

「うん、やってみる」

『フォルテなんか、俺たちで十分だぜー。』（ウォーロック）

「わたしも戦いますんで、任せくださいー。」（リソラ）

『ソラを死なせるなんてこと、させないわよ。』（ハープ）

「よし、じゃあ待つてくれ。すぐ作ってくれるからなー。」

パシュン・・・・

大吾は地球へ戻つていった・・・

ぐおおおおおおおおおおおお

熱斗と炎山は、まだフォルテを消しきれずにいた

「くそ・・・プログラムが・・・・効かない」（炎山）

「だ、大丈夫・・・・」（熱斗）

キーン・キーン・キーン・バ――――――――

辺り一面を爆風が包む

「きやつ・・・なにこの爆風」（ミンラ）

シユ――――ン・・・・・

「・・・・・収まつた・・・・・・・・・あつ！」（スバル）

スバルが見たものとは・・・

『・・・・・・・ぬるいな・・・』（フォルテ）

フォルテの右腕には熱斗、ソウルユニゾンが解けている  
炎山はもう消されてしまつたようだ・・・

・・・・・バンッ

フォルテは熱斗を投げ出し

ブー——ン・・・アースブレイカー

フォルテの放つた攻撃は、熱斗に直撃

・・・・・

『・・・反応がなくなりました』（ウォーロック）

「・・・そんな・・・熱斗さんが・・・」（スバル）

**撃破！！！**

「熱斗さんが…………やられた…………」

『集中しろ、スバル！』うなりや戦うまでだー！』

「…………わかった、ウォーロック…………行くよー！」

『そういういまの状態は、ハープクロス…………』

スバルはまだ、クロスカードの効力を維持していた

『…………つまらん…………』

フォルテは地球のほうに向かつて

・・・・・ブ――――ン・・・・・・

『おい、スバル！やつが地球を破壊するつもりだ、早くしろー！』

「スバルくん、さき行くよー。」

「待って、ミンラちゃん！」

「？」

「いま、ブラザーの能力を借りて戦えるクロスカーボットというものの使ってるんだ···」

そして今、ハープ・ノートのチカラを借りている···」

「···」

「このチカラは、ブラザーが信じれば信じてくれるほど増大するんだ

だから、改めて言うのもなんだけど···」『あん』

「···んつ？』

ミンラは首をかしげた

「…………えつ？」

「なんで謝るのかなー、って」

「それは…………記憶なへしてこの間はこうござりと  
いつてたから

…………氣にいのつかなかと思つて……」

「ああ、あんなことないよ」

「…………」

『スバルー急げ、もひせつがHネハギーをチャージしちまつー』

「わかった。//ソルトモ、行くよー。」

「うさ

シユ————ン・・・

一人はフォルテより地球側に回り込み・・・

一人とも、背に持つて いるギターを両手に出した

「よし」

「行くよー」

『・・・・ジャマだ・・・・』

・・・アースブレイカー

・・・・シヨックノー・・・・って

「なにこれー」(リンラ)

パ――――ツ・・・

二人の持っているギターが合体し、一つの大なギターが現れた

「・・・・」（ミンフ）

「」（れなら・・・?）

「」（れなら、フォルテの攻撃なんか楽勝ね!）

「・・・・よし」

「スバルくんは」この弦を押さえててね

・・・・いくよ・・・

ビッグノート フォルティツシモー

すると、巨大な音符が二人の両側に現れた巨大な装置から発射され

フォルテの衝撃波を切り裂いていく・・・

『・・・クツ・・・なぜ・・・なぜ負ける・・・』

音符がついにフォルテをとらえ

クツ・・・・グワアアアツ

・・・・・

「やつた、フォルテを倒した

「これで終わつたね！」

『厄介な相手だつたぜ』

・・・・・



「このことを父さんに連絡しないと……」

フォルテを撃破したスバルは、クロスシステムを解き  
一方のミソラも、スバルが連絡をし終えるまで待っていた

・・・プルルップルルッ・・・・・

「父さん？」

「スバルか、もうすぐで復元し終わるから待っててな

「……フォルテなら、もう倒せたよ」

「本當かー？よくやつたな、スバル！」

・・・・まだ終わってないよ

「だ、だれ！？」

ミソラが見た先には・・・

『・・・久しづりだね、ロックマン・・・いや、スバルくん』

「・・・・！？」

・・・・・ブツン・・・ツーツーツー・・・

「・・・・・ジユリィ・スパーク・・・・なんでー！？」

『ははっ、教えてやるつか』（ジHILLBRACK）

『君の知っている、ヨイリー博士に復活させられたのさ』（ジHILLBRACK）

「ヨイリー博士にー?」（スバル）

『ツカサの体内の残留電波を復活させてもういたのさ』（ジHB）

「でも、残留電波には、記憶なんて残つてないはずじゃ……」

（ツカサ）

『ほんとうみたいな上級の電波生命体は、オックスのような下級な電波生命体とは違う

『記憶データが全て残すことができるんだよ』（ジHILL）

『じゃあ聞くが、なぜここにいる』（ウォーロック）

『決まってるだろ……………フォルテを復活させて地球を滅ぼし、

F M星 ケフェウスを倒す』（ジェB）

『ほくらの能力を使えば、フォルテなんかすぐに再構築できるからな』（ジH W）

「…………そんなこと、絶対にさせない!」（スバル）

クロスカード プレティーシヨン!

・・・カツ・・・

『ハハハッ』（ジエB）

『フフフッ』（ジエW）

『・・・何がおかしい！』（ウォーロック）

「・・・ううつ・・・」

バタツ・・・

スバルは伏せこんでしまった

「スバルくん、だいじょうぶー！？」

『無駄だよ、ハープ・ノート』（ジH W）

『もうすぐ、そいつはフリーズしちまいのセー。』（ジH B）

「どうこう」とよー。」

『……スバル！早くクロスシステムを解除しろーーー。』

「くつ……ダメだ……」

『じゃあ、ツカサとのブラザーを切れ！』

「それは……いけないんだ……」

『なにこつてやがんだ。わいつじじり……。』

『ハーフ、ジニアを倒せば何とか……。』

「もうね、ハーフ！」

ショックノート

『ハーフのやつめー！』（ジニア）

『まみつ、じいちゃんウォーロックと同じ運命を辿つたいらしゃ  
（ジニア）

・・・・・ジニア・サンダー！

一人の右腕、左腕から放電され、ショック・ノートの音波を壊し

そのまま一直線にミソラへ向かっていく

(リビング)「ナニヤー？」

カンツ

「えつ」

「フリの前には、見覚えのある影が・・・

「ヒーローは後から現れる！」

「…………暁さん！？」

『シドウ……星河スバルの様子がおかしい……』（アシッ

丁

「ああ、そうみたいだな」

「あのジHIII・スパークを倒せれば……」(III-1)

『ははっ、ほくたれを倒すって?』(ジHIV)

『笑わせるな、お前らなんかに……グワッ……』(ジEB)

「……調子に……乗るな……」

……ブライソード……

ジHIII・スパークBの胸を貫通したブライソードが、体を引き裂く

・・・・・ザシュウ・・・・

『グワ――――ツ――』

「曉さん、なんのプライバシー？」（ハニカム）

「ははっ、俺もわからない」

『くつ、やられたか・・・』（ジヒウ）

『・・・次はお前だ・・・』

『せめてロックマンでも再起不能にしておくれ』

パシュン・・・

「逃げやがった……か

「…………くつ…………ぐわつ…………」

『ス…………バル…………早くしろ…………』

「スバルくん、もう少しの辛抱だ。」（暁）

『ジエミー・スパークWは地球から遠ざかっていた  
ブライに追いつかれないよ』・・・

『くっ、あの黒いやつの強さは何だ！』

『あんな電波体、見たことないぞ！』（ジエW）

・・・・・・・待ちなYO！！！

『ダレだ！』

『YOO-YO！…お前はジエミー・スパークで間違いないかYO！』

『・・・・ふざけた奴だ』

・・・・・Hレキソード！

『YOO！オレはムーン・ディザスター。

友人のロックマンを助けるため、君をデリートするYOO！』

・・・・・ムーンスピノン！

ムーン・ディザスターはスピノンし、三日月状の物体を発射していく

『なんだ、このふざけた技は・・・・・・うわあっ・・・

三日月状の物体がジヒミーに命中した

『くつ、頭がフラフラして、感覚が・・・・・』

『それは、当たると相手を混乱させるんだよ！』

『 残念ながら、これでおわりだYOYOYO~~~~~オ!』

・・・・ムーンバズーカ！！！

ムーンディザスターの手には、月の形をした球が現れ、

ヨオオオオオオオオオ——ツ！――！――！――！

発射されて、身動きの取れないジエミーに向かっていく

『ヘイ・ヘイ・ヘイ』

バーニング・ズ

・シユーラン

『これは・・・・人間かＹＯ』

電磁バリアをまとつて、緑色の髪をした少年が氣絶して宙に浮いていた・・・

『地球の奴か、コスモウェーブまで行くかYO!』

パシュン・・・・

そして、ムーン・ディザスターは地球に向かっていった・・・

## 第一部終了！

2週間ほど空けてしまつてすみませんでした

理由としましては、このあとストーリーを考えていきました

考えがまとまつたのでまた書いてこいつをおもいましたが、

自分で「第一話」の入りが悪くて納得できなかつたので、

もう一度ゼロから（流星のロックマンnextの続きですが）始めていきます

勝手なことをしましてすみませんが、これからは「流星のロックマンnext」の続きですか？

マン next st a ge?

～D.Dの暗躍～」（タイトルを変更しました）のせいでよみこへ  
お願いします。

今まで読んでいただき、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7862/>

---

流星のロックマンnext stage? ~FM星の危機・過去の遺産~  
2010年10月19日09時17分発行